



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	戦間期ハンガリーにおける人民運動の一考察 : 1930年代における知識人・民族・民主主義
Author(s)	佐藤, 紀子; SATO, Noriko
Citation	スラヴ研究, 24, 127-182
Issue Date	1979-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5091
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00002586873.pdf



戦間期ハンガリーにおける人民運動の一考察

—— 1930年代における知識人・民族・民主主義 ——

佐 藤 紀 子

目 次

はじめに	127
第1章 人民作家登場の背景	
第1節 下層農民・農業労働者をめぐる 社会経済的状态および政治状況	131
第2節 精神的・文化的背景	138
第2章 人民運動の組織化	
第1節 農村研究者の活動	141
第2節 人民運動の組織化	143
第3節 新精神戦線	150
第3章 三月戦線	
第1節 三月戦線の形成	157
第2節 三月戦線の活動	162
第3節 人民戦線政策のハンガリーへの 適用と三月戦線	168
第4節 三月戦線の解体	174
結びにかえて	177

はじめに

1937年3月15日のブタペシュト、国立博物館前の広場は、雨をついて集まった約5000人の若者達で埋まっていた。熱気の中で壇上に上がった1人の男が、あたかも「三月の青年達」Márciusi Fiatalok が12項目の要求 Tizenkét Pont を高らかに読みあげたり¹⁾1848年の集会を再現するかのようになり、89年後の12項目の要求を宣言した²⁾。これによって、民

1) C. G. Gati, *The Populist Current in Hungarian Politics 1935--1944*, Indiana University, Ph. D. thesis, 1965, p. 120.

2) 12項目の要求は、コシュート Kossuth Lajos の依頼によって、ベシュトのリベラルなサークル「反対派サークル」Ellenzéki kör が起草したものである。この要求は、その後ペターフィ Petőfi Sándor 等のラディカルなグループに受け入れられ、1848年3月15日に国立博物館前の広場で宣言された。「ハンガリー民族は何を望むか」と題された要求の内容は次の通りである。

「平和、自由、協調のあらんことを！」

1. 我々は出版の自由と検閲の廃止を望む
2. ブダペシュトにおける責任内閣を
3. ベシュトにおける毎年の議会の招集を
4. 市民的・宗教的な面での法の前における平等を
5. 民族防衛軍を
6. 共通課税を
7. 賦役の廃止を

主義が極めて制限されていた戦間期のハンガリーの民主化を要求する三月戦線 *Márciusi Front* の結成が告げられたのである。そして、この三月戦線の一年余の活動において指導的役割を担ったのが、いわゆる人民作家 *népi írók* あるいは人民主義者 *népiesek* (または農村研究者 *falukutató* と呼ばれる) であった。

本稿では、この人民作家あるいは人民主義者による人民運動に焦点を絞り、運動の三月戦線に至る経過と三月戦線の意義を考えようとするものである。そして、それによって、封建遺制を引きずったままで資本主義の道を歩まねばならなかった後発資本主義国における人民の解放の在り方を検討し、後発資本主義国ゆえの民族主義をまとった民主化運動の一形態を明らかにし、ひいては、ハンガリーの人民民主主義革命の前史を解明しようとするものである。

戦間期のハンガリーは、1919年にハンガリー・ソヴィエト共和国を打倒した反革命勢力の指導者ホルティ *Horthy Miklós* を頂点に据えた大土地所有貴族と大資本家そして下級貴族・軍人・公務員層の三大勢力に支配されていた⁸⁾。この体制の下でもっとも抑圧されていたのは、人口の約36パーセントを占める農業労働者・貧農層であった。彼らは公的生活から疎外され、また自らも無知と貧困に甘んじていた。このような彼らの物質的、精神的貧困からの解放を求めて立ち上がったのが、人民作家達であった。彼らの多くは、農村出身の知識人で、自らの精神的拠り所とする農民を民族と国家の支柱とすることをめざしていた。したがって、人民運動の「人民」とは農民をさしている。彼らは、初め農村において社会学的、民俗学的調査と資料収集を行なったが、1930年代初頭から、世界恐慌の影響を受けて一層悲惨な生活を強いられた貧農・農業労働者の諸問題を社会に告発する言論活動を開始した。彼らの当初の目的は、貧農・農業労働者の状態を改善する改革を政府に促すことであった。こうして、1935年の春に彼らは、改革プログラムを掲げて首相の座に就いたゲムベシュ *Gömbös Gyula* との会談に至った。しかし、支配層の良心と善意に訴えて改革を実現させるという彼らの楽観的展望は、全体主義独裁体制の確立のためのデマゴギーとして改革を公言していたにすぎなかったゲムベシュに見事に裏切られた。改革の実現があやしくなるにつれ、作家の多くは政府に対する期待を捨て去った。その後、彼らは、警察の度重なる弾圧にもめげず、再び貧農や農業労働者の諸問題を告発し始めた。そして、1937年3月に、当時人民戦線政策のハンガリーへの適用をせまられていた共産党の支援も得て、変革を望む学生・知識人を動員した三月戦線が結成されたのである。発表された12項目にわたる要求は、ファシズムの抬頭を前に、貧農・農業労働者の救済という従来の人民運動の枠を越え、すべての抑圧された者達のために国の民主化を要求するも

8. 平等な権利に基づく普通陪審制、代表権を

9. 国立銀行を

10. ハンガリー人兵士の外国派兵の拒否と外国人の我が国からの追放を軍隊は憲法に宣誓せよ

11. 政治犯の釈放を

12. トランシルヴァニアとの結合を我々は望む

平等, 自由, 博愛

(*Vas Zoltán, Kossuth Lajos élete*, Budapest, 1965, 231-232 l.)

3) Hanák Péter, Lackó Miklós és Ránki György, "Gazdaság, társadalom, társadalmi-politikai gondolkodás", *Történelmi szemle*, 1969, XII ev., 3-4 sz., 431-432 l.

のであった。そして、この三月戦線は、戦間期のハンガリーにおいて党派を越えた、民主化のために闘うすべての人々の初めての結集の場になろうとしていた。だが、国際的なファシズムの前進とそれに呼応するかのような国内ファシズム勢力の抬頭、政府による弾圧の強化、さらには貧農・農業労働者の救済という一点で統一されていたいわば寄合所帯の人民運動がもつメンバーの思想的対立の顕在化によって、三月戦線はまもなく崩壊した。その後、人民運動は左右に分裂し、右派は民族主義的色彩を濃くしファシズム・グループに接近した。一方左派は、第二次世界大戦中にかけて、反ファシズム抵抗運動に加わっていった。彼らは、戦後、人民民主主義革命を経た後、ラーコシ Rákosi Mátyás 体制下では攻撃を受けたが、1953年以降のナジ Nagy Imre 時代に再び復活した⁴⁾。

以上のような人民運動の歴史は、ハンガリーにおける民主主義獲得の闘争史の一段階として、あるいは民主化運動の一例としてだけでなく、その後起こった人民民主主義革命の前史として運動をとらえることを示している。

それでは、人民運動の研究は従来どのようなようになってきたのであろうか。

人民運動の最初の研究は、1930年代の終りに共産主義者レーヴァイ Révai József によって執筆された『マルクス主義と人民主義』 *Marxizmus és népiesség* (1938年) およびモスクワで発行されていた雑誌『ウーイ・ハング』 *Új hang* (新しい声) に掲載された論文であった。これらの研究・論文類は、いずれも、崩壊する三月戦線と分裂する人民運動に対して、ハンガリーにおいて人民戦線を結成するために共産党と同盟可能な者を見出すという政治的動機から執筆されたものであったので、思想的、イデオロギー的観点からの評価に留まり⁵⁾、歴史的・文学的視点が欠落している。前記のレーヴァイの著作は、三月戦線の要求と農村研究者の著作を高く評価し、人民運動が戦間期におけるもっとも重要な知識人の運動であるとしたが、同時にまた運動内にファシズム的危険性の存在することを警告し⁶⁾、同盟可能な要素とそうでないものを区別していた。またレーヴァイは、1937年の秋から人民運動に関する論文を合法・非合法の雑誌に発表しており、これらの一連の作業を通して、すでにこの頃から新しい人民民主主義的変革の理論を構築しつつあった⁷⁾。

その後人民運動の研究が再び現われたのは、ハンガリー動乱以後であった。1950年代の論文に特徴的なことは、1953年-1956年に現われた修正主義への人民主義者の影響を指摘することである。ここでは、人民運動は、その民族主義的性格が社会主義革命、共産主義イデオロギーに敵対するものと評価され、運動の民主的側面、戦間期のハンガリーにおける進歩的側面が正しく評価されなかった⁸⁾。

1960年代後半になると、人民運動の研究に新たな視点が導入された。これ以降の研究では、人民戦線政策とからめて三月戦線を語り、その中で人民運動に言及するという特色がみられる。このような、かつて1930年代後半において、人民運動を人民戦線政策との関

4) “A népi írókról. Az MSzMP Központ Bizottsága mellett működő kulturális elméleti munkaközösség állásfoglalása”, *Társadalmi szemle*, Jun., 1958.

5) Sóter István (szerk.), *A magyarországi irodalom története*, Budapest, 1966, 290 l.

6) U. o. 290 l.

7) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, Budapest, 1976, 851 l.

8) 前記のハンガリー労働者党中央委員会の見解や Diószegi András, “A népi írók nacionalizmusról”, *Kortárs*, 9, 1958. など。

連でとらえたレーヴァイ等共産主義者の姿勢の復活ともみえる現象は、新しい経済改革の実施と符合するかのよう現われたことを考えれば、1956年動乱の政治的混乱を收拾し、より柔軟な姿勢で政治的民主化と経済改革を推進し、社会主義建設を行なおうとする1960年代後半の政治状況を反映したものといえよう。この時期における代表的研究としては、『ハンガリー文学史』*Magyarország irodalom története* (1966年)をあげることができる。ここでは、イデオロギー的、思想的側面から運動の進歩性ならびに退行性あるいは限界が指摘されている。一般に、1960年代における人民運動の評価は、いわゆる後発資本主義国では民主化運動あるいは革命が、民族主義的要素を取り込まざるをえないという視点に欠けていた。

しかし以上のような状況は、1970年代以降、ラツコー Lackó Miklós の一連の論文⁹⁾の発表によって前進しつつある。彼は、運動の中に理想主義や退行的側面の存在を指摘しつつも、人民主義者のように「民族・民族主義的基盤に立つことは、社会主義的左翼の図式的な階級理論や抽象的な国際主義に対して現実的対応となる¹⁰⁾」と述べて、戦間期における人民主義に一定の進歩的側面の存在を認めた。しかし、ラツコー自身、1974年に発表した論文の中で、人民運動の集中的研究は端緒についたばかりであると述べているように¹¹⁾、運動の詳細かつ包括的研究は、ハンガリー国内では、これからというのが現状のようである。

他方、ハンガリー国外における人民運動の研究は、1960年代前半にアメリカにおける論文の発表をもって開始された。この時期に特筆すべきことは、1965年に発表されたガティ C. G. Gati の論文¹²⁾において、権威主義体制下における政治的反対派の在り方、知識人の役割という視点から人民運動を考察したことである。しかし、その後、ハンガリー国外において研究成果の発表は跡絶えたが、ようやく1970年代後半に至って新しい成果が現われつつある。これらの研究の特色は、反革命体制下における運動の進歩的役割、戦後の変革の準備という面を強調し積極的に評価することにある¹³⁾。

以上のハンガリー国内、国外の研究に特徴的な相違は、前者が人民運動の発展における共産党の役割を概して強調しているのに対し、後者は運動への共産党のイムパクトを二義的に考え、運動の自律的発展を強調する点にある。

このような研究動向を踏まえて、本稿では以下のことを解明することを目的としている。

1. 人民運動が登場するに至った背景を、社会的・経済的・政治的・文化的に探ることによって、戦間期のハンガリーが抱えていた諸問題を呈示し、人民運動が戦間期ハンガリ

9) Lackó Miklós, “A nemzedéki tömörlülésről és a szakadásról. A népi mozgalom kezdetei.”, *Új írás*, 1971.; “Az Új Szellemi Front története”, *Századok*, 4-5, 1972.; “A népi mozgalom az 1930-as évek magyar szellemi válságában”, *Történelmi szemle*, 4, 1974. 前二者の論文は、Lackó M., *Válságok-választások*, Budapest, 1975. に収録されている。

10) Lackó M., “A népi mozgalom az 1930-as évek magyar szellemi válságában”, *Történelmi szemle*, 4, 1974, 545 l. (以下 “A népi mozgalom” と略す)。

11) U. o., 543 l.

12) C. G. Gati, op. cit.

13) 前記のガティの論文や、コーヘン A. Cohen, の *Le Populism Hongrois avant la Deuxième Guerre Mondiale*, Université de Paris VIII, Thèse de Doctorat, 1975. など。

- 一の諸矛盾を体現していたことを示すこと。
2. 人民運動の発展過程を追うことによって、ハンガリーに固有な、伝統に根ざした知識人の民族主義的な民主化運動の進歩性と退行性を明示すること。
 3. 戦間期において初めて、民主化を望むすべての人々の結集の場となろうとした三月戦線の活動と意味を明らかにするとともに、合わせてハンガリーにおける人民戦線政策の適用過程を描写し、戦間期における民主化運動、反ファシズム闘争の頂点の一コマを再現すること。

ただし、本稿では、筆者の力不足から運動史において、民主主義勢力結集の場として結集力と影響力、進歩性においてその頂点にあった三月戦線までの時期に叙述を限定することとする。

そこで、本文の構成は以下の3章からなる。

まず第1章では、人民作家登場の背景を、社会的・経済的・政治的・文化的側面から描写し、戦間期のハンガリーが抱えていた諸矛盾の一端を明示する。

第2章では、以上を背景として登場した人民作家、人民主義者の人民運動への結集過程、さらには政府への接近過程を探る。言い換えれば、人民運動が純粋な文学活動から次第に政治性を帯びてゆく過程を描く。

第3章では、政府との協力に失望した人民運動が、「下から」の改革を志向するに至る経過を、共産党の人民戦線政策と関連させながら述べ、戦間期人民運動の頂点である三月戦線の活動とその意義を考える。

第1章 人民作家登場の背景

第1節 下層農民・農業労働者をめぐる社会経済的状态および政治状況

ハンガリーにおける人民作家登場の背景には、無知と貧困にあえぐ下層農民・農業労働者の存在があった。いわば人民運動は、戦間期ハンガリーが抱えていた社会的矛盾を体現していたといえよう。そこでまず、運動の背景となった農民をめぐるハンガリーの経済状態と政治状況を考えてみたい。

西ヨーロッパにはるかに遅れて1860年代以降本格的に工業化を開始したハンガリーでは、20世紀にはいっても依然として経済の中心部門を農業が占めていた。就業別人口における農業の割合は、1920年でも55.7パーセント、1930年でも51.8パーセントであった¹⁴⁾。また、国民所得に占める農業の割合は1920年で41.8パーセント、工業のそれは29.8パーセントであった。しかし、1930年代後半に工業が著しく発展したために、1938年における国民所得配分では、農業の割合が36.5パーセントであるのに対して工業のそれは35.7パーセントとほぼ等しくなった¹⁵⁾。このような国民所得における変化にもかかわらず、輸出においては農業の占める優位な地位は変わらなかった。1910年においてハンガリーの

14) 同時期の鉱工業の割合は、30.1パーセントと32.3パーセントである (I. T. Berend and Gy. Ránki, *Hungary — A Century of Economic Development*, New York, 1974, p. 151)。

15) I. T. Berend and Gy. Ránki, *Economic Development in East-Central Europe in the 19th and 20th Centuries*, New York, 1974, p. 307 (以下、*Economic Development* と略す。南塚信吾監訳、『東欧経済史』中央大学出版部、1978年、369ページ)の表参照。

輸出における主要5品目（穀物—小麦とトウモロコシ、小麦粉、家畜・畜産品、果物）だけで、輸出総額の57.9パーセントを占めていた¹⁶⁾。一方、1938年の統計によれば、ハンガリーの輸出に占める食品と家畜の割合は55.3パーセントである¹⁷⁾。以上のデータからわかるように農業輸出は、ハンガリーの国際収支における要であった。

しかし、こうしたハンガリー経済の要である農業輸出を支えていた農業構造は、けっして近代的なものではなかった。それは、第一に、土地所有の極端な不平等にみられた。1921年1月20日から実施された土地改革は、1919年の反革命として、さらに反革命体制の維持・強化の一手段として導入されたために¹⁸⁾、不平等な土地所有の構造を根本的に変革するものではなかった。この結果、大量の貧農・農業労働者の数は本質的に減少しないまま、それどころか僅かな土地を手に入れた半プロレタリアートが大土地所有者のための低廉な労働力の供給者となり、大土地所有の強化に貢献することとなった¹⁹⁾。したがって、30年代に至っても、大土地所有と零細土地所有という二極構造に変化はなく、それはかえって強化されていたのである²⁰⁾。

第二に、大経営においては土地所有と経営の分離、労働力・生産物の商品化、近代技術の導入、世界市場との結合等の資本主義的要素が発展していたが、その一方で不分割世襲

16) Ibid., p. 183.

17) Ibid., p. 370.

18) 貧農にいくらかの土地を与えることによって彼らを労働者階級との同盟から切り離し労働者を孤立させ、革命勢力の弱体化を計るとともに、土地改革によって大土地所有制を温存したまま富農を強化して反革命政権への支持を得るという意図から導入された (M. Incze, "The Conditions of the Masses in Hungary during the World Economic Crisis of 1929-1933," *Acta Historica*, III/1-2, 1954, p. 32. 以下, "The Conditions" と略す)。

19) 平泉公雄「ハンガリー農業の展開過程, プロシア型の道の生成, 発展, 没落」アジア経済研究所調査研究部所内資料, No. 47-1, 1972年, 68ページ。

20) 土地改革後の土地分配

1ホルド hold=0.575ヘクタール

経営規模 (ホルド)	1929年				1935年				1935年の対1925年 比較(%)		
	経営数	構成比 (%)	面積 (1000 ホルド)	構成比 (%)	経営数	構成比 (%)	面積 (1000 ホルド)	構成比 (%)	経営数	面積	一経営 当り 面積
~5	719,498	63.1	1,330	9.1	1,042,520	69.3	1,423	8.9	144.9	107.0	73.8
5~10	181,174	15.9	1,338	9.1	198,645	13.0	1,433	8.9	109.6	107.1	97.7
10~20	211,755	18.6	4,097	27.9	160,339	10.5	2,267	14.1	116.6	117.5	100.8
20~50					86,464	5.5	2,548	15.9			
50~100	13,973	1.2	965	6.6	16,327	1.0	1,102	6.9	116.8	114.2	97.8
100~1000	10,920	1.0	3,193	21.9	11,356	0.6	3,153	19.7	104.0	98.7	94.9
1000~	1,661	0.2	3,719	25.4	1,517	0.1	4,107	25.6	91.3	110.4	120.9
全 体	1,138,981	100.0	14,642	100.0	1,517,168	100.0	16,033	100.0	133.2	109.5	82.2

(出所) 平泉公雄「ハンガリー農業の展開過程, プロシア型の道の生成, 発展, 没落」アジア経済研究所調査研究部所内資料 No. 47-1, 1972年, 72ページ。

土地改革後の土地所有構造の変化の分析は、日本では平泉公雄論文に詳しい。

財産制や農民経営および一部地主経営における原始的農業技術²¹⁾、農業労働者と雇主との封建的関係の存続²²⁾等の封建的要素が強固に残存していた。

以上のような農業構造の中で、工業労働者への道がきわめて限られていた農業人口²³⁾の約3分の2を占める「300万人の乞食達²⁴⁾」といわれる貧農・農業労働者²⁵⁾の窮乏化は、

21) 同上，98-99 ページ。

22) 現物賃金の存在や、経営者や管理者が雇人に肉体的徴罰を加えることが正当と認められていたことなどに見られた (Incze Miklós (szerk.), *Az 1929-1933. évi világgazdasági válság hatása Magyarországon*, Budapest, 1955, 90-91 l. 以下, *Az 1929-1933* と略す)。

23) 就業別人口

	1920年	%	1930年	%	1941年	%
農 業	4,449,104	55.7	4,499,393	51.8	4,539,000	48.7
商 工 業	2,402,799	30.1	2,806,232	32.3	3,258,000	34.9
鋳 工 業	1,639,653	20.6	1,998,298	23.0	2,366,000	25.4
商 業・金 融	407,020	5.1	469,059	5.4	517,000	5.5
通 信・運 輸	356,126	4.4	338,875	3.9	375,000	4.0
そ の 他	1,128,240	14.2	1,382,694	15.9	1,523,000	16.4
合 計	7,980,143	100.0	8,688,319	100.0	9,320,000	100.0

(出所) I. T. Berend and Gy. Ránki, *Hungary—A Century of Economic Development*, p. 151.

24)

農村人口の内訳 (1930年)	扶 養 者 所 有 者	構 成 比 (%)	総 人 口	構 成 比 (%)	所有面積比 (%)
貧農					
農場労働者 (作男)	218,044	14.6	599,622	13.3	
その他の土地なし農民	478,255	32.0	1,005,267	22.3	
5ホルド以下所有農民	443,606	29.7	1,490,369	33.1	9.0
総 計	1,139,905	76.3	3,095,258	68.8	
小・中 農 (5~20ホルド)	268,149	17.9	1,065,431	23.7	21.9
富 農 (20~100ホルド)	68,222	4.6	286,381	6.4	20.0
中規模地所の所有者 (100~1000ホルド)	6,638	0.4	22,901	0.5	17.5
大土地所有者 (1000ホルド以上)	745	0.05	2,242	0.05	26.8
執 事	5,611	0.4	13,223	0.3	
小 作 人	5,193	0.3	14,057	0.3	
総 農 業 人 口	1,494,463	100.0	4,499,393	100.0	

(出所) Incze M., *Az 1929-1933*, 86 l.

25) 農業労働者は、農場労働者、季節労働者、日雇農民、刈り入れ人夫からなっていた。

農場労働者 *cseléd* は、農業労働者の主たる構成者をなしていた。彼らは形式的には契約による自由な労働者であったが、実際には精神的、物質的に封建遺制に就縛され主人に隷属していた。彼らの生活環境は、イェーシュ・ジュラ Illyés Gyula の小説『プスタの民』*Puszták népe* (1936年)に詳述されている。

農場労働者は年雇と日雇に分かれ、前者は大経営で後者は富農経営で支配的であった。年雇の賃金はコンヴェンツイオー *Konvenció* と呼ばれ、宿泊場、土地の使用、現物、現金からなっていた。1930年頃における健康な労働者1人当たりの年平均賃金は、1ホルドの土地の通年利用権、小麦(またはライ麦)9キンタル、ライ麦5.5キンタル、大麦2.25キンタル、牛乳1リットル、現金20ペンゲー *pengő* であった。彼らは、現物で支払われた穀物の一部を売って生活必需品の購入費にあてていたもので、恐慌による農産物価格の下落は大きな打撃であった。月雇は大経営においては農繁

世界恐慌以降一層進んでいた。それは、収入の実質的減少、労働条件の悪化、失業の増加、負債や税負担の増大等によってもたらされたものであった。たとえば日雇を除く農業労働者の多くは現物賃金を受け取っていたが、その価値の減少は以下の表に表わされている。

表(1) 「現物賃金」の貨幣価値

年	農場価格で計算された賃金の貨幣価値	指 標 1924/25-1926/27=100	農場価格 1924/25-1926/27
1924/1925	786	114	109
1925/1926	638	94	92
1926/1927	648	95	96
1927/1928	700	101	105
1928/1929	585	85	100
1929/1930	555	80	85
1930/1931	474	69	70
1931/1932	386	56	57
1932/1933	313	45	48
1933/1934	246	36	45
1934/1935	343	50	51
1935/1936	338	49	56
1936/1937	383	55	51

(出所) M. Incze, "The Conditions" p. 58.

表(1)は、農場労働者の現物賃金を貨幣に換算したものである²⁶⁾。表からわかるように、現物賃金は30年代には恐慌以前の半分以下に減少している。しかもこの場合、農場での取引価格は賃金ほど下落していなかった。また、農場労働者の賃金は貨幣でも支払われていたが、それだけでは生活できなかつたので、現物で支払われた穀物売って現金を得ていた²⁷⁾。したがって、恐慌による農産物価格の下落は、彼らにとって手痛い打撃であった。また、表(2)は、日雇労働者の賃金の実質的減少を表わしている。これによれば、日当は1935年までに絶えず減少している。右欄の衣類の小売価格をもとに、日当の実質額を計算すると、もっとも賃金の高かつた1929年でさえ1913年より12パーセント低下している。さらに1937年では1929年よりも44パーセント低下している。²⁸⁾

次に、季節労働者、日雇農民、刈り入れ人夫は主として農繁期に雇用されていたので、

期の補助労働か富農経営においても主に夏期に雇用されたので、冬期には失業を余儀なくされた(Incze M., *Az 1929-1933*, 91-92 l.)。

季節労働者 *summások* は、20-30人の青年や少女の集団で2ヵ月から6ヵ月間大経営で雇われる出稼ぎ農夫をさし、農場労働者とともに大経営を支えていた。(U. o., 93 l.)

日雇農夫 *napszamosok* は土地なし農民や貧農から構成されていた。彼らは主に手間仕事として富農に雇用され賃金は現金払いであった(U. o., 97 l.)。

刈り入れ人夫 *aratások* は現物の出来高払いで働く大経営周辺の農民をさし、この雇用形態がハンガリーでもっとも普及していた。彼らは季節労働者と同様、春から大経営に雇われ、晩秋まで事実上の賦役と結びついた契約によって様々な仕事に従事した(U. o., 93-94 l.)。

26) 土地1ホルドはトウモロコシの平均収穫高の3分の2を産出するものとして、穀物と牛乳は農場取引価格で計算し、これに現金給与を加えたものとする(M. Incze, "The Conditions" pp. 57-58)。

27) *Ibid.*, p. 60.

28) *Ibid.*, pp. 66-67.

表(2) 日雇男性労働者の日当(夏期)

P = ペンゲー

年	男子の夏期における日当 (農業中央委員会の統計)			衣類の小売価格	
	P	1913=100	1929=100	1913=100	1929=100
1913	3.92	100	—	100	—
1929	4.30	100	100	132	100
1930	3.60	92	84	127	96
1931	3.20	82	74	116	88
1932	2.40	61	56	111	84
1933	1.80	46	42	103	78
1934	1.70	43	40	102	77
1935	1.70	43	40	103	78
1936	1.80	46	42	117	89
1937	2.50	64	58	136	103

(出所) Ibid. p. 66.

表(3) 土地所有規模別負債(1932年)

P = ペンゲー

範 疇 (ホルド)	負債(100万P) (1932年の終わり)	農 場		1ホルド当り平 均負債(ペンゲー)
		経営数(1000)	面積(1000ホルド)	
勤労農民保有				
~5	677.3	1,506	1,509	448
5~10	184.7	204	1,477	125
10~20	227.9	144	2,026	112
合 計	1,088.9	1,854	5,012	217
富 農				
20~50	258.5	74	2,172	119
50~100	106.1	15	1,036	102
合 計	364.6	89	3,208	113
大 経営				
100~500	223.6	10	1,986	113
500~1000	126.6	1	944	134
1000~	368.6	1	4,829	76
合 計	718.8	12	7,759	93
全 範 疇	2,171.3	1,955	15,979	136

(出所) Ibid. p. 43.

農閑期にはかなり恒常的な失業状態がみられた。しかも30年代にはいと農繁期でさえ失業する者が増加して、1935年-1938年で平均して12万~13万人が失業していた²⁹⁾。農閑期にはこれよりもはるかに多くの失業者がみられた。完全にあるいは主に賃労働で生活している農業労働者は年平均5カ月程度雇用されたにすぎなかった³⁰⁾。

また、負債の重さについては、表(3)からわかるように、勤労農民の負債額がもっとも多く、全体の50.1パーセントを占めている。特に0~5ホルド層の農民の負債額の大き

29) E. Pamłényi (ed.), *A History of Hungary*, Budapest. 1973, p. 502.

30) M. Incze, "The Condition", pp. 52-53.

さは注目すべきものであった。

このように、貧農・農業労働者は、農産物輸出の直接の価値の生産者であるにもかかわらず、その恩恵を被ることなく、恐慌以降ますます困窮を極めていた。換言すれば、大恐慌以降、国際収支の要であった農産物輸出の拡大によって恐慌からの脱出を計ろうとするハンガリーの支配層と、東欧を世界征服のための食料・原料基地とすることを企むヒトラー・ドイツとの接近という1930年代の国際関係の土台は、精神的、物質的に封建遺制に捕縛されつつ、また資本主義的搾取をも強化され、貧困にあえいでいた貧農・農業労働者によって築かれていたのである。そして、このような状況が、戦間期に人民作家の登場をもたらした要因のひとつであった。

人民作家が誕生する第二の要因は、上記の状態にあった貧農・農業労働者の権利を主張、あるいはその利益を擁護し、彼らの状態を改善しようとする者が、政府の厳しい監視の下で徹底的に弾圧され有効な力を持つことができなかったという状況にあった。

戦間期のハンガリーでは、貧農や農業労働者の利益を直接代表する政党は、1939年に人民主義者の一部によって結成された民族農民党 *Nemzeti Paraszt Párt* を³¹⁾除けば存在しなかった。その代わりに、20年代において農民の支持を受けていたのは、全国小地主・耕作者党 *Országos Kisgazda és Földműves Párt* であった。この政党は、農民大衆から支持を得ていたが、実際は富農および地主の利益を代表していた³²⁾。それは、議会で第一党となった³³⁾同党の指導者ナジャターディ=サボー *Nagyatádi Szabó István* が起草した1920年の土地改革法が、すでに述べたように大土地所有制に支配された不平等な土地所有構造を根底から改革しようとするものではなかったことから理解される。

1921年10月23日の第二次カーロイ IV 世 *Károly IV* クーデター未遂事件以後、首相ベトレン *Bethlen István* (1921年4月14日-1931年8月18日) は、従来与党を構成していた王制派のキリスト教民族統一党 *Keresztény Nemzeti Egyesülés Pártja* と袂を分かち、与党の再編成をめざして全国小地主・耕作者党に接近した。1922年2月23日に新しい与党に関する合意が成立し、統一党 *Egységes Párt*、正式にはキリスト教小地主耕作者・市民党 *Keresztény Kisgazda Földműves és Polgári Párt* が結成された³⁴⁾。こうして、全国小地主耕作者党がベトレンと連合したことによって、同党の政策における大衆性が失われ、1920年代においては土地所有農民でさえ、独立した代表政党を失った。

また社会民主党 *Magyar Szocialdemokrata Párt* も、反革命テロルが吹き荒れた後の自己防衛のために、戦後まもなく政府に接近した。1921年12月21日に社民党の指導者ペイエル *Peyer Károly* とベトレンとの間に、いわゆるベトレン=ペイエル協定が結ばれた。政府との妥協であるこの協定は、工業労働者の労働組合の存続と社会民主主義者の選挙権の獲得等の代償として、公務員や鉄道労働者・農業労働者の扇動や組織化を社民党が事実上放棄することを取り決めていた。それは、社民党指導部が、労働者=農民同盟の成立を

31) Ránki György (szerk.) *Magyarország története*, 931 l.

32) E. Pamlényi (ed.), *op. cit.*, p. 457. 全国小地主耕作者党は1919年11月29日に結成された。

33) 1920年1月25-26日に行なわれた選挙で、同党は91議席を獲得して第一党となり、政治的発言力を増大させた(Ránki György (szerk.) *Magyarország története*, 451-453 l.)。

34) U. o., 445-446 l.

妨害しようとする支配層の意図に従うことを意味していた³⁵⁾。

さらに、被抑圧者の解放を自認する共産党 *Kommunisták Magyarország Pártja* も、貧農や農業労働者に対する政策は一貫していなかった。それは、ひとつには戦間期を通して政府が共産主義者を徹底的に弾圧したことに起因していた。と同時に、ハンガリー・ソヴィエト共和国下における農業政策の記憶が、農村に共産主義が根づくことを困難にしていた。その農業政策とは、政治的、経済的な配慮から、100ホルド以上の教会領地および中規模以上の地主の土地を農民に分配することなく、無償没収によって社会化し、協同組合方式の大経営を作り出すというものであった。しかし、この政策こそ、土地を渴望していた貧農や農業労働者の共産党やソヴィエト共和国にたいする期待を裏切り、彼らを急速に共和国から離反させたのであった³⁶⁾。

共和国崩壊後、反革命テロルとその後の政府の弾圧政策によって国内での活動を著しく制限されていた共産党の主流派は、20年代には依然としてソヴィエト共和国時代と同じ農業政策を採り続けていた。しかし、非合法化されていた共産党が、国内におけるその基盤作りのために1925年4月14日に結成した合法政党ハンガリー社会主義労働者党³⁷⁾ *Magyarországi Szocialista Munkás Párt* の政策は、従来の共産党の政策とは異なっていた。この党は、労働者と農民によって統治される過渡的段階としての共和国を当面の目標として掲げ、大衆の動員による体制の打倒をめざして社民党的な労働者とブルジョアジーの協調政策を拒否し、労農同盟の形成を提唱した³⁸⁾。そしてこのための政策として、1926年の春に、1000ホルド以上の大地所の収奪によって得られた土地の無土地農への無償分配を主な内容とする「新土地改革」と題した農業改革の包括的プログラムを発表した³⁹⁾。しかし、同党は、1927年の初めからの警察の徹底的弾圧によって指導部が逮捕され、1928年には活動の停止を余儀なくされた⁴⁰⁾。その後、この党を指導したランドレル・グループの一人としてルカーチ *Lukács György* は、第二回党大会に向けて、社会主義労働者党の政策の基礎となった「プロレタリアートと農民による民主主義的独裁」を基本路線とする指導方針案、いわゆるブルム・テーゼ *Brum Tézis* を発表した。だがこのテーゼは、1928年夏のコミンテルン第6回大会で決定された「資本主義の第三期論」に基づく社会民主主義との対決の方針と真向から対立するものであったため、このテーゼに対する激しい批判が起り、1930年の2月から3月にかけて開催された第二回党大会において否決された⁴¹⁾。したがって、これ以後も共産党は、コミンテルンの指導方針に則った階級対階級の戦術と国内の状況との間で動揺した。

以上のように、ハンガリーの貧農・農業労働者は、第一次世界大戦以後、困窮を深めつ

35) U. o., 448-448 l.

36) U. o., 231 l.

37) 同党は、クン・ベーラ *Kun Béla* 等党内主流派に対するランドレル *Landler Jénó* 等の反対派グループが中心となって結成された(池田浩士編訳、『ルカーチ初期著作集』第4巻、三一書房、1976年、395ページ)。

38) 同上、133ページ、ブルム・テーゼ参照。

39) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 563 l.

40) U. o., 564 l.

41) 池田編訳、『ルカーチ初期著作集』396ページ。

つあったが、反革命体制の抑圧の中で、1920年代においては、自ら改革に立ち上がろうとする者はおらず、また彼らを封建遺制と資本主義の桎梏から解放しようとする政治勢力も、短命であった社会主義労働者党の他には存在しなかった。このような状況が、人民運動が戦間期のハンガリーに登場する一背景をなしていたのである。

次に、次節では、運動の精神的、文化的背景を述べる。

第2節 精神的・文化的背景

19世紀後半からの工業化の進展とともに、ハンガリーにおいても都市と農村との隔差が次第に拡大していった。特に世紀転換期以降この対立は顕著となり、ブダペシュトの発展は目覚ましいものであった⁴²⁾。

このような状況と並行して、ハンガリーの知識人の構成に変化が現われた。19世紀までの知識人は、非ハンガリー人の知識階級と貴族・ジェントリーによって構成されていたが、世紀転換期以降ジェントリーの没落が進み、彼らに代わって前者の中産階級が抬頭してきた⁴³⁾。彼ら都市の中産階級知識人は、進歩的で西欧志向の都市文化を形成し始めた。彼らの一部は、その中心フォーラムとして、1908年に雑誌『ニュガト』*Nyugat*（西方）を創刊した。同誌は、文学と芸術における革命を提唱し、ブダペシュトの中産階級の経済的・精神的支援を受けて、新しい文学の旗手となった⁴⁴⁾。一方、没落して軍人や公務員となった地方のジェントリー層は、このような状況を不満とし、強い反都市感情を抱くに至った⁴⁵⁾。

1919年以後、民族主義思想の影響が増大するにつれ、アナクロニスティックで民族的偏見に支配されたジェントリーの勢力が強まった。と同時に、進みつつあった社会変動が、主として地方の貧しい農民出身の新しい知識人階級を登場させた。彼らにとって、自分達がいかなる階級の名の下に指導的役割を果たすかということが、大きな問題であった。没落したジェントリー出身の知識人にも、また都市の知識人にも同化できない彼らは、社会主義に活路を求めることも拒んだ。彼らは、「真のハンガリー人である農民」の大部分から遊離した従来の知識人の在り方や、ハンガリーが西欧と同じ発展過程を辿るという考え方を拒否したのである⁴⁶⁾。そして、最終的には農民こそ民族の支柱となるべきだとする彼ら独自の意識をもつに至った。

農村出身の知識人は、19世紀半ばに封建制の廃止、自由、民族独立のために闘ったペテーフィ Petőfi Sándor 等の若い詩人や作家達⁴⁷⁾に、文学的・精神的源泉を求めた。彼らは、

42) G. Gömőri, "Social Conflict in Hungarian Literature 1920-1966", *Journal of International Affairs*, 20. 1966, p. 152.

43) Lackó M., "A népi mozgalom", 544 l.

44) T. Klaniczay, *History of Hungarian Literature*, Budapest, 1964, p. 190.

45) G. Gömőri, *op. cit.*, p. 152.

46) Lackó M., "A népi mozgalom", 544 l.

47) 1848年革命前後にブダペシュトのカフェ・ピルヴァクスCafé Pilvax に集まったペテーフィを初め、アラニ Arany János, ヴァイダ Vajda János, トムパ Tompa Mihály, ヴァシュヴァーリ Vasvári Pál, ターンチッチ Táncsics Mihály に代表される急進的知識人。この内、ペテーフィは、革命的手段による人民の解放を志向し、詩作と政治的扇動を通してそれに貢献した。またヴァシュヴァーリは、小ブル大衆や労働者に急進主義を説いた。ターンチッチは、農民の利益擁護においてはこのグループの中でもっとも非妥協的な闘士で、貴族の特権や農奴制の廃止などもっとも急進的な改革プログラムを提唱した (E. Pamlényi (ed.), *op. cit.*, p. 252)。

文学のテーマを人民の諸層，農民階級に見出し，庶民の言葉を初めて文学に導入し，また農民を民族の中軸と考えた。この意味で，後の人民主義者は彼らの伝統を継承していたといえる⁴⁸⁾。

ペテーフィ等革命的人民主義者に続いて，戦間期の人民主義者に影響を与えたのは，20世紀初頭に活躍したアディ Ady Endre であった。彼は詩人であると同時に進歩的ジャーナリストとして，1901年以降，「政治的言論界で，盲目的愛国主義，権威主義，反ユダヤ主義，反啓蒙主義および無知に対する激しい文化的闘争を指導した⁴⁹⁾。」1912年頃までに彼は、『ニュガト』の指導者となり，社会主義的革命家にはならなかったが，自らを農民の代表と考え，労働者階級や社会主義を支援し，ブルジョア民主革命のために闘った⁵⁰⁾。以上のような彼の封建遺制に対する容赦のない不断の闘いは，ペテーフィ等とともに，人民主義者に政治的イデオロギー的思想の支柱を残した⁵¹⁾。

だが，人民主義者に直接の思想的・方法論的影響を与えたのは，サボー・デジュー Szabó Dezső とモーリツ・ジグモンド Móricz Zsigmond であった。両者は，それぞれ異なる個性や文学的方法・思想をもっていたが，ハンガリーの封建的性格に対する深い嫌悪と農民への愛着，「農民社会主義」という点では一致していた⁵²⁾。

第一次大戦以後，都市と農村の対立が一層深まる中で，反革命体制は，トリアノン条約の修正と結びついた侵略的ナショナリズムを煽るとともに，ドイツ系・ユダヤ系ブルジョアジーと社会主義者に自らの無能の責任を転嫁した⁵³⁾。当時もっとも影響力のあった歴史家セクフュー Szekufú Gyula は次のように指摘している。

「ハンガリーにおける資本主義は，主としてユダヤ的で，工業化は大資本によって遂行されてきた。……ブダペシュトはその性格上，ハンガリー的ではなく，『真の』ハンガリー文化は腐敗していない地方にのみ発見できる。」⁵⁴⁾

彼のこの思想を補強したのが，サボー・デジューであった。彼が1919年に発表した『エルショドルト・ファル』 *Elsodort falu* (全滅した村) は，ハンガリー人種の減少を嘆くとともに，農村の原始的健全さを賞賛し，民族的再生を要求して，国内に大きな反響を呼び起こした⁵⁵⁾。その後彼は，20年代から30年代にかけて特に政治評論に活動を集中した。1923年に，「我々の基本的等式は，ハンガリー農民=ハンガリー民族=ハンガリー人種であ

48) A. Cohen, *Le Populisme Hongrois avant la Deuxième Guerre Mondiale*, Université de Paris VIII, Thèse de Doctorat, 1975, p. 30.

ペテーフィに関しては，人民作家の一人であるネーメット・ラーズロー Németh Lászlóが，「(ペテーフィという)言葉は，我々の文学のもっとも美しい伝統と最高の望みを表わしている。」と述べている。また，イエーシュは，1936年にペテーフィの伝記を出版した。しかし，ペテーフィは，彼らにとっては，すでに革命的民主主義者としてではなく，道徳的モデルとしての意味しかもたなかった (Sóter István (szerk.), I. m., 304 l.)。

49) T. Klaniczay, *op. cit.*, p. 193.

50) *Ibid.*, p. 197, A. Cohen, *op. cit.*, p. 34.

51) Sóter István (szerk.), I. m., 360 l.

52) C. G. Gati, *op. cit.*, p. 40.

53) G. Gömöri, *op. cit.*, p. 152.

54) *Ibid.*, pp. 152-153.

55) T. Klaniczay, *op. cit.*, p. 250.

56) C. G. Gati, *op. cit.*, p. 41.

る。』⁵⁶と述べているように、彼の基本的精神は、「民族の中軸」としてのハンガリー農民への賛美であった。具体的には、「外国人の血で汚された⁵⁷⁾」状態からの出口を理想化した農村の生活様式への回帰に求め、ハンガリー人の人種性と文化を擁護するために農民の権利擁護と生活条件の向上を要求した⁵⁸⁾。ハンガリー人種を絶対的優位に置く彼の思想は、必然的に反ユダヤ主義および反ドイツ主義に導かれた。また、「ユダヤ人の民族主義である左翼インターナショナリズム」をユダヤ人帝国主義の「文化的道具」であるとして、左翼にも敵対した⁵⁹⁾。人民主義者は、このような彼の思想から、ハンガリー農民への関心を触発され、その「民族の中軸」としてのあるべき姿を継承した。

他方、モーリツは、サボー・デジュエーのように、激しい反ユダヤ主義者でも、また『ニュガト』に集まる都市派 *urbánus* と親交はあっても都市派でもなく、政治やイデオロギーにかかわることはなかった⁶⁰⁾。しかし、彼は、特に農民を主題とした小説によって、文学においてもっとも傑出した作家の一人と言われた。彼の作家活動の初期（1908年-1910年）には農民生活の新しい肖像画家として、また『ニュガト』の編集者の一人として活躍したが、1918年-1919年の革命を支持したために戦後迫害された⁶¹⁾。その後しばらくの沈黙の後、20年代の終りから農民の生活を観察するために地方を訪れ始め、貧農の生活や諸問題を題材とした小説を発表した⁶²⁾。このような彼の小説作法が、人民作家の社会的・政治的調査と文学の方法に影響を与えた。

さらに、人民作家の先駆者として、おそらく彼らに影響を及ぼしたであろうエルデーイ *Erdélyi József*⁶³⁾ をあげることができる。彼も1920年代初めから地方を旅し、農民を主題とする詩を発表した。彼の初期の詩は、革命的情熱に漲り、貧農の運命に対する叫びや領主への呪い、農民のより良い未来への希望が表現されていた⁶⁴⁾。

このように、農民の民族への統合、全人民のための一般民主主義、自由といった問題は、19世紀の半ば以来、ハンガリーの文学、精神生活における基本的問題をなしていたが、それは20世紀の30年代に至っても未解決のまま残されていた。そして、このことが人民作家の登場の文化的・精神的背景となったのである。

以上のように、人民作家が戦間期に出現するにあたっては、1920年代に至っても貧農や農業労働者等が封建遺制と資本主義的搾取の両方に苦しんでいたにもかかわらず、彼らの権利を擁護する者がほとんど力を持てなかったという状況や、19世紀以来農民の民族への統合、民主主義・自由という問題の解決に取り組んで来たハンガリー知識人の伝統が存在していた。

57) *Ibid.*, p. 41.

58) S. B. Vardy, *Modern Hungarian Historiography*, New York, 1976, pp. 131-132.

59) C. G. Gati, *op. cit.*, p. 43.

60) *Ibid.*, p. 46.

61) T. Klaniczay, *op. cit.*, pp. 200-201, p. 203.

62) C. G. Gati, *op. cit.*, p. 48.

63) 彼はハンガリー人とルーマニア人の両親から生まれた。30年代には 極右政党に参加し、ユダヤ人を攻撃する詩を書いた。1945年以降転向した。

64) Sóter István (szerk.), *I. m.*, 252 l.

第2章 人民運動の組織化

第1節 農村研究者の活動

新しい人民主義と呼ぶことのできる文学的傾向の萌芽は、第1章第2節で述べたサボー・デジューやモーリツの中にすでにみられ、「トリアノン条約によって生み出された状況の中で、芸術と文学は、民族の保持する価値の模索に着手していた。」⁶⁵⁾しかし、後に人民運動に結集する知識人達は、この時期にはまだそれぞれの道を歩んでいた⁶⁶⁾。

1920年代の後半になると、サボー・デジューやモーリツ、エルデーイ等の影響を受けて、共産主義にも反革命体制にも失望した若い知識人や学生達が、ハンガリーの再生のために、「ハンガリーとは何か」という探求を開始した⁶⁷⁾。そこで彼らは、ブダペシュトや地方の都市において、全国の農村調査や資料収集とその公表を目的とするクラブや団体を結成し始めた。これらの団体に結集した若い知識人や学生達は農村研究者⁶⁸⁾と呼ばれた。彼らは、ナロードニキとは異なり、農民の生活環境や文化に関するデータの収集を行ない、都市の知識人や支配階級に農民の状態に対する関心を惹起するために農村へ赴いた⁶⁹⁾。

このようなサークルの内、代表的なものは、バルタ・ミクローシュ協会 Bartha Miklós Társaság や鎌運動 Sarló, セグドの大学生のサークルなどであった。まず、バルタ・ミクローシュ⁷⁰⁾協会は、主として戦前トランシルヴァニアやスロヴァキアに住み戦後ブダペシュトに移住してきた若い作家や学生達によって、1925年に結成された。1928年には内務大臣の認可も受け第一号の会誌を発行した。その後、雑誌『ウーイ・マジアル・フェルド』*Új magyar föld* (ハンガリーの新しい大地)を獲得した。その他、協会の指導的メンバーの多くは、バイチ=ジリンスキー・エンドレ⁷¹⁾ Bajcsy-Zsilinszky Endre と後の人民作家の一人であるフェーヤ・ゲーザ Féza Géza によって編集された雑誌『エレーオールシュ』*Előőrs* (前衛)にも投稿していた。協会は、このような雑誌を通しての言論活動の

65) Sóter István (szerk.), I. m., 295 l.

66) U. o., 295 l.

67) U. o., 355 l.

68) 最初の農村研究者の著作といえるものは、急進的ブルジョア社会学者ブラウン・ロベールト Braun Robért によって1913年に発表されたマロシチェール Marossicsér 村のモノグラフィである (*Új magyar lexikon II.* Budapest, 1961-1962, 283 l.)。

69) C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 51-52.

70) バルタ・ミクローシュ (1848年-1905年)は政治家兼ジャーナリストで、大土地所有制を激しく批判し、反資本主義・反ユダヤ主義を標榜した (A. Cohen, *op. cit.*, p. 35)。

71) 急進的政治家。彼がサボー・デジューの精神的影響を受けて30年代初頭に唱えた「民族急進主義」は、人民主義者の「第三の道」概念と同様な基点に立脚していた。彼は中間階級の社会的・良心的グループによって組織された農民運動を新しい秩序の創造者と考え、独立小地主党のプログラムよりも急進的な、たとえば、広範な層に渡る改革、貧農・無産農民の利益擁護という社会的プログラムを提示した。また彼は、イタリア・ファシズムのイデオロギー的影響を受けて協同組合に基づく新しい体制を構想したが、これは理想主義的な農民・小ブルジョア階級の秩序の創造と考えられる。30年代前半において、彼は人民運動と関係を保持しつつもそれに同化しようとはしなかった。その後、ゲムベシュの「改革時代」のファッショ的性格が露呈されるにつれ、リベラル民主主義傾向を強め、後に独立小地主党に参加した。第二次世界大戦下では反ファッショ闘争に携わり殉教者の英雄となった (Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 837-838 l.)。

他に、農民の社会的状態を研究する委員会の形成や、不定期ではあるがパネル・ディスカッション⁷²⁾の開催、また社会学や文学の研究書の出版に努めた⁷³⁾。そして、ここでは、「右翼、むしろ右翼や極右に失望した青年達が、左翼や左翼から退いた青年達と議論し、また、時代の新しい混沌としたイデオロギー的傾向（人民主義的人種神話や農民ロマン主義と結びついた農業急進主義、民族的ポリシュヴィズムなど）の要素が、ブルジョア思想に取り巻かれていた。」⁷⁴⁾しかし、30年代の初めから次第に右派が協会の主導権を掌握するようになり、その後衰退した⁷⁵⁾。協会のメンバーで、後に人民作家となった者は、イエージュ、コドラーニイ Kodolányi János、フェーヤ、エルデーイで、その他バイチ=ジリンスキーや左翼詩人のヨーゼフ・アッティラ József Attila も所属していた⁷⁶⁾。

バルタ・ミクローシュ協会と並んで活発な活動を展開していた鎌運動「シャルロー」は、1928年にプラハやブルノ、ブラチスラヴァのハンガリー人ボーイ・スカウトが主体となって結成された団体である。運動のメンバーは、サボー・デジュエーからハンガリー民族主義を、音楽家バルトク Bartók Béla やコダーイ Kodály Zoltán さらにモーリツから農民文化への愛情を、ヤースィ Jászi Oscár から「ドナウ・ヨーロッパ」の構想を継承していた。運動は、当初、ハンガリー人少数民族の経済的・社会的・文化的状態を調査するサマー・キャンプに限られていたが、1929年に運動の新しい綱領で、若いプロレタリアートや農業労働者の組織化を運動の中心目的に据えて以来急進化した。そして、1931年のブラチスラヴァの大会において、運動が社会主義的・マルクス主義的組織であることが表明され、プロレタリアートと被搾取農民・進歩的知識人を担い手とする革命の必要性が認識された。こうして、シャルローはまもなく共産主義者が掌握することとなった。この運動は、ハンガリー国内の急進主義者やバルタ・ミクローシュ協会とも接触したので、ハンガリーでも有名となった⁷⁷⁾。

その他、農村研究者の運動として、セゲド大学の若い研究者や芸術家からなる農業セトルメント運動 *agrársettlement mozgalom* とセゲド青年芸術コレギウム *Szegedi Fialatok Művészeti Kollegiuma* をあげることができる。前者は、1928年にブダイ Buday György の指導の下に社会学や民俗学、文学、芸術を専攻する学生が集まってできたサークルで、ハンガリー特有の農村の居住形態タニャ *tanya*⁷⁸⁾ の研究を主な活動としていた。一方、芸

72) たとえば、1928年11月にブダペシュトの図書館で4日間に渡り行なわれたパネル・ディスカッションでは、協会のメンバーがパネラーとなり農民の参加を得て議論が展開された。最初にナジ・ヤーノシュ=アフラ Nagy János Afra が貧農の大学・高校進学率の低さを問題とした。2日目には、土地なし農民の解放が、彼ら自身にの手によってなされるべきか、それとも中産階級によって担われるべきかについて議論された。3日目のパネラー、ファビアン Fabian Daniel は、「ヨーロッパの未来とハンガリー農民」と題する講演を行ない、経済的文化的に異質な西欧からハンガリーに固有な文化と伝統を守るために、ハンガリーが指導的役割を担う中東欧農民国家連邦の形成を提唱した。4日目には、農民問題の政治的側面に関して議論が展開され、参加者は強力な農業政党の必要性において合意した (C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 54-57)。

73) *Ibid.*, pp. 52-53.

74) Lackó M., "A nemzedéki tömörlülésről és a szakadásról", *Válságok-választások*, Budapest, 1975, 20-21 l. (以下 "A nemzedéki tömörlülésről" と略す)。

75) Sóter István (szerk.), I. m. 293 l.

76) C. G. Gati, *op. cit.*, p. 69.

77) *Ibid.*, pp. 63-65.

78) タニャとは、田舎町や村の郊外にある孤立した農業地域における農場と住居を一緒にした居住形態をいう (*Kislexikon*, Budapest, 1968, 837 l.)。

術コレギウムの方は、前者が収集した資料に基づく討論や、戦争と平和・農民芸術・ハンガリー文化史におけるセゲドの役割などをテーマとするパネル・ディスカッション、民俗学や社会学・文学史等の研究の出版、さらには農村やタニャの写真・演劇史の資料の展示等の活動を行なった。両サークル共、15～20人からなるエリート集団であった⁷⁹⁾。このサークルから、後にエルデイ Erdei Ferenc、オルトゥタイ Ortutay Gyula が人民運動に参加した⁸⁰⁾。

さらに、群小のグループがかなり存在した。たとえば、後の人民作家コヴァーチ Kovács Imre やサボー・ゾルタン Szabó Zoltán が所属していたカトリック系のボーイ・スカウト「青年ハンガリー」⁸¹⁾、政治家や官僚、カトリック教会に対して経済的・社会的改革のアピールをする⁸²⁾「ウェシェレーニイ改革クラブ」Wesselényi Reform Klub や「青年ハンガリー人サークル」Fiatal Magyarország Köre、またトランシルヴァニアのハンガリー人大学生によって1930年に組織された政治組織「エルデーイ青年」Erdélyi Fiatalok などが存在した⁸³⁾。

以上のような20年代から30年代にかけての農村研究者の様々なサークルは、農民に対する関心や愛情を共有していたとはいえ、左右の派が混在する中で様々な方法で農民および農民問題にアプローチしていた。そして、こうした活動が、人民運動への結集を準備したのであった。

第2節 人民運動の組織化

第1節で述べたような様々なグループに属しそれぞれ独自の活動を行っていた大学生や若い知識人の人民運動への集結は、特に1930年代初期の世界恐慌によって促進された政治的・社会的・経済的変動に起因していた。

世界恐慌は、20年代後半によりやく安定の兆しを見せ始めていたハンガリー経済を根底から揺さぶり、反革命体制の社会的基盤⁸⁴⁾を動揺させた。体制の三大支柱のひとつである大土地所有階級は、この恐慌によって大資本家よりも大きな打撃を受け、何の効果的対策も施さないベトレン政権に対する不満を高めていた。またもうひとつの支柱である軍人・国家公務員を初めとする中産階級も、失業の増加や収入の減少によって生活を脅かされ、富裕なユダヤ人に対する反感や無能な政府への不満を募らせていた⁸⁵⁾。そして、当然のことながら、恐慌の打撃をもっとも強く受けていたのは労働者と農民であった。1930年9月1日に首都のブダペシュトで10万人を動員して行なわれた戦間期最大のデモは、政府の徹底的な弾圧を受けたが、これは労働者の大きな不満の表われであった⁸⁶⁾。また、1930年に

79) C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 58-61.

80) Sóter István (szerk.), I. m., 294 l.

81) U. o., 294 l.

82) C. G. Gati, *op. cit.*, p. 67.

83) Sóter István (szerk.), I. m., 294 l.

84) 反革命体制は、大土地所有者、大資本家、前者と結びついた上級将校・官僚の諸グループの相互の競合の中で維持されている妥協の産物であった。この体制の中で、大資本家は保守的自由主義的傾向、大土地所有者は保守的権威主義的傾向、軍人・国家公務員グループはファッション的傾向を代表していた (Hanák Péter stb., I. m., 323 l.)。

85) E. Pamlényi (ed.), *op. cit.*, pp. 486-487.

86) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 613 l.

比較的若い指導者によって再建された独立小地主党⁸⁷⁾ Független Kisgazdapárt が、村々で急速に人気を高め、1931年6月の終りに行なわれた選挙において10議席を確保した⁸⁸⁾ という事実も農民層の不満を表していた。

このような体制の支持基盤の動揺に直面したホルティは、国際的なファシズムの前進に歩調を合わせるかのように、体制の支柱のひとつであり、ベトレン派に対する最大の反対勢力であった極右的志向をもつ軍人・国家公務員層の代表ゲムベシュを首相の座につけた(1932年10月1日-1936年10月6日)。ヨーロッパ全体を席卷しつつあったファシズムの流れにある程度身を任せることによって、体制は動揺した社会基盤の建て直しを計ったのであった。

首相に就任したゲムベシュは、その施政方針演説において、95項目から成る「国家事業計画」Nemzeti Munkaterv を発表した⁸⁹⁾。彼は、この改革プログラムの公表によって、経済状態の悪化に不満を抱く中産階級や職のない大学卒業生の政府への支持を獲得し、全体主義独裁のための足がかりを得ようとしたのである⁹⁰⁾。

このような状況のなかで、1932年に、運動のもっとも重要なイデオログであるネーメット・ラースローが、従来の西欧志向を修正し、個人誌『タヌー』*Tanú* (証言, 1932年-1936年)を創刊した。彼は、この雑誌を通じて、彼固有の思想である「質の社会主義」*minőségszocializmus* を提唱し⁹¹⁾、それは人民主義思想の一典型となると共に、やがて1935年に人民主義者を政府に接近させる要因となった。

87) 同党は、1930年10月13日にスイイ Sziji Bálint の指導の下に、限嗣相続と1年の徴兵、国境修正を主な内容とする綱領を掲げて結成された。ところが、12月10日に同党は、ガアール Gaál Gaszton の指導する大地主的性格の強い農業党 Agrarpárt と連合し、独立小地主耕作者・市民農業党 Független Kisgazda Földművesés Polgári Agrarpárt を結成した。(Ránki György (szerk.) *Magyarország története*, 626 l.) この党の代表者は、支配階級内の反対派や民族統一党の解体の結果同党の農業派から分離した者、あるいは農業デマゴギーで生きている政治家からなっていた (Ságvari Ágnes, *Népfront és koalíció Magyarországon 1936-1948*, Budapest, 1967, 57 l.)。にもかかわらず、同党は農村において高い人気を保っていた (Ránki György (szerk.), *Magyarország története* 626 l.) 党の綱領は、ティルデイ Tildy Zoltán, ナジ・フェレンツ Nagy Ferenc その他によって起草された。以下がその基本的な項目である。

- a) 公開投票の禁止
- b) 農業改革の実現 (農民の土地所有の強化と大土地所有の経済的影響力の停止)
- c) 消費財価格の引き下げと農業価格の引き上げ
- d) 累進課税
- e) 人民の文化水準の向上, 農民の啓蒙
- f) 行政の簡素化と墮落の防止, 人民の社会問題への行政の理解
- g) 労働者階級全体に等しく渡る社会保険 (C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 73-74)

88) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 629 l.

89) 彼は、プログラムの究極目標を「ハンガリー固有の目的をもつ民族国家の建設」に置いた。彼の政治目的は、「民族共同体の利益」「民族的利益」に奉仕することであり、政府を支持する勢力が「民族勢力」とされた。プログラムは、トリアノン条約の修正やドナウ河流域におけるハンガリー国家の指導的役割の達成、経済的には土地改革、税制改革、失業対策、政治的には秘密投票の導入等、95項目に渡る改革を掲げていた。しかし、但し書きのついた項目や相互に矛盾した内容をもつ項目の存在は、改革が社会的デマゴギーであることを露呈していた (U. o., 667-681 l.)。

90) Lačko M., “Új Szellemi Front történetéhez”, *Válságok-választások*, 59 l. (以下“Új Szellemi Front”と略す)。

91) 『タヌー』に発表された論文は、1942年-1943年に *A minőség forradalom* と題されて出版された。

しかし、知識青年達が人民運動へ結集する直接の契機は、1933年に『ニューガト』の9月号において、イエーシュが紀行文「滅亡」“Pusztulás”を發表したことであった。この論文は、バラニャ地方の農民の間で慣習化している一子制 egyke という現象を取り上げて、ハンガリー人種の滅亡の危機と、その一方でのドイツ人の増加、さらにこれを是認する農民の無気力を世論に問うていた⁹²⁾。彼は、一子制の原因を、土地の細分化への危惧、すなわち大土地所有の存続とそれに由来する社会構造に帰し、その解決策として植民と土地改革を要求した。しかし、この「滅亡」は、一子制などの問題を扱う際に、「主観的経験を客観的データや記述と総合する方法」を用いたことによって問題がやや過大評価され、また急進的な土地改革の必要性を叫んでも滅亡に対する危機感や救済の叫び声にかき消されて、改革のための具体的な手段を提示するには至らなかった⁹³⁾。

ところが、「滅亡」はまもなく国内に大きな反響を巻き起こした。まず雑誌や新聞に一子制や植民に関する記事が掲載され、大学生の間では農村研究運動が盛んとなった。聖職者の集会でも一子制の社会的・宗教的原因が話題となり、議会でも取り上げられた。さらに、この問題提起は、民族擁護・人種擁護に結びつけられて、様々な右翼的な運動に青年達が参加する契機をつくった。換言すれば、「一子制に対する闘い、人民の上昇、植民あるいは土地改革、人民の種の擁護の……スローガンのまわりで、すべての民族主義的改革思想が互いに接点を見出すことができた」のである。これによって、改革思想を掲げたゲムベシュと人民作家との接近の可能性が開かれた。しかし、1933年においてはまだ、接近のための具体的な行動はとられていなかった⁹⁴⁾。

1934年に入ると、イエーシュの問題提起に触発されて、人民主義者の結集の最初の試みがなされた。それは、人民運動の論壇となる『ヴァーラス』Válasz (答, 1934年-1938年, 1946年-1949年)の創刊である。ネーメット・ラースローの発案によって、1934年5月に東部ハンガリーの農業都市デブレツェン⁹⁵⁾で創刊された同誌は、最初は美術史家フュレプ Fülep Lajos, グヤーシュ Gulyás Pálそしてネーメット・ラースローによって編集されていた。しかし、第3-4号から、上記の3人を含む15人の投稿者の名前が表紙を飾った。上記の3人以外のメンバーは、社会学者ブダイ、作家で政治家でもあるフェーヤ、作家で詩人のイエーシュ、デブレツェンで影響力のある文学史家ユハース Juhász Géza, 農業問題を専攻する学者ケレク Kerek Mihály, 作家コドラーニイで教師の小地主党の代議士マトルチ Matolesy Mátyás, 作家プロハースカ Prohászka Lajos, 随筆家サボー・ラースロー Szabó László Cs., 翻訳家で詩人のサボー・レーリンツ Szabó Lőrinc, 文学史家で随筆家のセルブ Szerb Antál, トランシルヴァニア出身の小説家タマーシ Tamási Áronであった。そしてこの他に、マルクス主義的作家ダルヴァシュ Darvas József, 社会学者エルデイ, 詩人エルデーイ, 作家サボー・ゾルターン, 小説家ヴェレシュ Veres Péter, 劇作家で小説家ジラヒ Zilahy Lajos, 当時はまだ大学生であったコヴァーチ, 作家ネーメット・

92) Lackó M., “Új Szellemi Front”, 77 l.

93) Lackó M., “A nemzedéki tömörlülésről”, 37-38 l.

94) Lackó M., “Új Szellemi Front”, 77-79 l.

95) ネーメット等は、デブレツェンに以前から存在したアディ協会 Ady Társaság という民主主義的な若い知識人と接触があり、彼らから新しい雑誌を創刊するにあたって支援を受けた(C. G. Gati, *op. cit.*, p. 96)。

イムレ Németh Imre, 詩人シャルルケジ Sárközi György の9人がしばしば同誌に投稿していた。以上の24人が人民運動の主要な担い手となってゆく⁹⁶⁾。『ヴァーラス』は、その2号までネーメット・ラースローのイデオロギー的・政治的役割を強く反映していたが、それ以後は彼の役割は後退し、秋以降文学的傾向が強まり、改革思想のうちでも土地改革と植民の思想だけが取り上げられるようになった⁹⁷⁾。

これ以後運動は、同誌を通しての活動を続けると共に、改革を実現するために次第に政府へ接近してゆくこととなる。社会主義者やブルジョア急進主義者のゲムベシュ批判にもかかわらず、ネーメット・ラースローやイエーシュ、フェーヤ、コドラーニイ等運動の指導層をゲムベシュに近づけたのは、メンバーに共通した思想——民族的・民族主義的 *nemzetinacionalista* 思想であった。けれども、彼らは同様な精神的・イデオロギー的過程を経てゲムベシュの民族主義的改革政治を支持するに至ったのではなかった⁹⁸⁾。

政府への接近を間接的・理論的に支援したメンバーの一人は、ネーメット・ラースロー⁹⁹⁾であった。彼は、イエーシュの「滅亡」に触発されてハンガリーの運命に対する関心を深め、「質の社会主義」や「第三の道の探求」 *harmadikutás* などの理論を展開した。「質の社会主義」とは、社会的というよりはむしろ文化的・道徳的な思想で、民族的伝統とヨーロッパ的教育とを混同した一種の道徳であった¹⁰⁰⁾。具体的には、それは、国家による資本主義の成長の徹底的抑制、高級官僚支配の制限、個人的指導力と才能の尊重、仕事芸術であるような一種の封建的世界への回帰、土地改革、富の公平な分配等を唱っていた¹⁰¹⁾。彼の哲学の根本には、「19世紀精神」の批判、すなわち、「人間を核化し、質に代わって量を尊重する資本主義」でもなく、また「技術発展や資本主義に対しての第一の大きな反応であるマルクス主義的社会主義」でもない「第三の道」という理念が存在していた¹⁰²⁾。このため彼は、反革命体制の支柱である伝統的保守的右翼ならびにブルジョア急進主義・マルクス主義を主要な敵とした。したがって彼は、「第三勢力」として反社会主義・反保守主義を掲げて登場したゲムベシュの支持基盤である中産階級の極右勢力の性質を真に認識することができなかった。それどころか彼の「新貴族」 *új nemesség* ——中産階級の文化的エリート——を基盤として「質の社会主義」を実現するという思想は、極右勢力との同盟を是認する可能性を内包していた¹⁰³⁾。

当時、人民作家の前には、改革を実現するために、直接政治に参加する道と間接的に政治に作用する道が開かれていたが、作家の任務を「社会や人民生活の重要な問題の暴露およびこれに不可欠な精神的エリートの教育」にあるとするネーメット・ラースローは、人民運動が「政党運動ではなくて全般的な文化運動としての改革政策の精神的基盤の確立者、

96) *Ibid.*, pp. 96–98.

97) Lackó M., “Új Szellemi Front”, 83 l.

98) *U. o.*, 91 l.

99) 彼は、ガゼット Ortega y Gasset や マン Henrik de Mann, ジード, ルソーなどの影響を受けていた (Lackó M., “Új Szellemi Front”, 26–30 l., C. G. Gati, *op. cit.*, p. 87).

100) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 296 l.

101) C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 85–86.

102) Lackó M., “A nemzedéki tömörlülésről”, 26 l.

103) Lackó M., “Új Szellemi Front”, 92 l.

『時代の精神』と政治運動間の精神的補強の保証や政治思想の推進力」となるべきであると考えた。彼のこのような思想も、ゲムベシュへの接近を準備したといえる。しかし、彼は、人民作家が政府や中産階級極右勢力の道具となることを望んだのではなく、彼らの精神的・文化的活動が中産階級の世論や政府に大きな影響を及ぼすことができるという幻想を抱いていたのである¹⁰⁴⁾。

運動のもう一人の理論的代表者であるイエーシュも、ネーメットと同様な幻想を少なからず有していた。しかし彼がゲムベシュに接近するに至った動機は、ネーメットのようなイデオロギー的帰結としてではなく、絶望にあった。すなわち、敗北意識、社会革命への失望、左翼の衰退、文化的経済的状態の悪化、滅亡、移動の不可能な人民の運命に対する諦念、民族解体の悪夢等が、出所のいかんを問わない貧民への援助の必要性を認識させた。また彼が、作家の世論形成に果たす役割を過大評価したことも、ゲムベシュへの接近に道を開いたといえる¹⁰⁵⁾。

その一方で、彼は、農民伝説や「人民の生存本能」の尊重という非合理主義に陥っていたネーメット・ラースローとは異なり、人民運動のイデオロギー形成において進歩的貢献をした¹⁰⁶⁾。それは、時代の状況に即応できないでいた左翼にとって、民族主義的思想の左翼的思想体系への導入が時代の要請であった時代に、ハンガリー史に伝統的な左翼性と民族的・民族主義的思想を結合したことであった。すなわち、イエーシュは、民族概念と進歩概念とが相互に連関・共存する民族的・民族主義的思想の名において、人民主義的傾向と社会主義の総合や、ハンガリーの民族的特質かつ民族的伝統としての左翼性を主張したのである¹⁰⁷⁾。

人民運動の他のメンバーの当時の見解には、ネーメット・ラースローやイエーシュに見られるモチーフが多かれ少なかれ存在すると同時に、個々の作家に特有な思想が見られた。

たとえば、フェーヤは、人種的偏見や民族主義的な精神において自己流に解釈したアデオとサポー・デジェーの影響を受け、社会問題の急進的解決を主張する一方で¹⁰⁸⁾、極めて排外主義的な思想を唱えた。彼は、サポー・デジェーに影響され、都市の文化は本来的にドイツ的であり、民族文化および人民文化は封建的ハンガリーにこそ存在すると考え、ハンガリーの都市化や「ユダヤ的コスモポリタニズム」文化を拒否あるいは批判した。そして、彼は、現在の憂うべき状況からの脱出口を、「人民文化と高度な人間的・民族的文化」との特殊な総合に求め、農民と下級貴族に備わった「ハンガリー人精神」がそのような文化の創造者であり、このために知識人は農民と運命共同体を造らねばならないと考えた。したがって、ブルジョア急進主義と保守的ナショナリズムは否定された¹⁰⁹⁾。

また、コドラーニイ¹¹⁰⁾の思想は、シュペンゲラーの没落理論と人民の生存本能という非

104) U. o., 95-96 l.

105) U. o., 98-99 l.

106) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 842 l.

107) Lackó M., "A nemzedéki tömörlülésről", 35-36 l., 40-41 l.

108) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 842 l.

109) U. o., 33-34 l.

110) 彼は初め、左翼の政治運動に参加し、古いブルジョア的・農民的世界や富への崇拜の打倒に情熱

合理主義思想との混合から形成されていた。彼によれば、西欧の没落を導く資本主義文化を受容することは、ハンガリー人の滅亡を招来する。そこでこれを阻止する唯一の方法は、「ハンガリー人本来の個性」を尊重することであるとされた。彼は、このような非合理主義的思想をもちながら、急速かつ広範な土地改革・植民と結合した新しい相続法、農業と工業の生産協同組合化、人民の教育の民主化等の急進的要求を提示した¹¹¹⁾。

以上のような彼らの思想的多様性にもかかわらず、ハンガリー人の滅亡に対する危機感、貧農や農業労働者の利益擁護を目的とする彼らの非人間的な生活状態の社会的提示や土地改革の要求、「民族の下」に貶められてきた彼らを民族へ「上昇」させる要求等の共通項によって、彼ら人民主義者の結合が維持されていた。また思想的にも、共同体を解体し人間を疎外する資本主義と、抽象的で非民族的な社会主義という二者択一からの脱出口として、特殊ハンガリー的な第三の道を志向するという点で¹¹²⁾、さらに伝統的な保守主義や極右的民族主義とは異なり、新たに民族主義の支柱を農民に求める点で、合意が存在していた¹¹³⁾。

ところで、国内で大きな反響を呼んでいた人民作家達に対して、全体主義独裁体制の確立をめざすゲムベシュが目をつけなければならなかった。彼は、仲介役として、かつて白色テロルの遂行者で今やハンガリーの情報産業の中枢に座ったコズマ¹¹⁴⁾ Kozma Miklós や、ネーメット・イムレ、ジラヒ、そしてカンドー Kandó László などを利用した。

コズマのいここにあたるカンドーは、1934年4月に開かれたコズマ——イエーシュ——ネーメット・ラースローの会談を準備した。彼は、当時形成されつつあった人民運動のメンバーが集まるブダペシュトのカフェ・ツェントラル Café Centrál へ定期的に通い、彼らと接触した。こうしてコズマを知った人民作家達は、1934年の冬からは定期的にコズマの家を訪問するようになった¹¹⁵⁾。

また、ネーメット・イムレは、1920年代の終りに、コズマからハンガリー情報機関 Magyar Országos Tudósító の責任ある地位に招請を受け、30年代からは彼のために人民作家との関係の創出や、出版・文学政策上の助言を与えていた。その後、1933年11月に

を傾け、共産主義的作家とみなされていた。しかし、1932年以降、労働者階級の運動から離れ、反ユダヤ主義に傾倒して右派人民主義者の代表となっていた (T. Klaniczay, *op. cit.*, p. 265)。彼の思想は、1934年に出版された『没落するヨーロッパ——没落するハンガリー人』*A hulló európa-hulló magyarság* の中で示されている (Lackó M., “Új Szellemi Front”, 101 l.)。

111) U. o., 101-102 l.

112) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 839-840 l.

113) U. o., 839 l., 「反革命体制は、民族主義的傾向にだけ活動の余地を保証し、また人民運動のメンバーは民族主義に育まれて成長したので、この枠を受け入れ、これに新しい内容を付加しようとした。」

114) コズマは、元職業軍人でセゲドの反革命組織の情報将校となり、その後ホルティ軍の軍事政策の担当者となった。戦後、まず外国の情報収集のために設置されたハンガリー電信公社 Magyar Távirati Iroda の代表およびハンガリー・ラジオ株式会社 Magyar Rádió Rt. の筆頭重役を兼任し、20年代の終りには、前者の付属施設として設立されたハンガリー情報機関 Magyar Országos Tudósító の責任者にも就任して、彼の影響力はフィルム製造の分野にまで及んでいた。このような地位にある彼はまた、戦争体験の小説化を初めとして右翼思想の普及に努めた (Lackó M., “Új Szellemi Front”, 61-62 l.)。

115) U. o., 63 l.

彼はコズマを通してゲムベシュに紹介され、人民作家とゲムベシュとの会談にひとつの布石を置いた¹¹⁶⁾。

仲介役を果たしたもうひとりの人間ジラヒは、当時もっとも人気の高い作家であった。彼の作品は、1930年代の初めには社会的問題性を強くはらんでいたが、本質的には、「ブルジョア化し近代化を肯定する紳士中産階級の趣味を反映していた。」彼は、ゲムベシュと親交があり¹¹⁷⁾、またコズマとも親しい友人関係にあった。1933年10月24日にマジャー劇場 Magyar Színház で初演されたコメディ『12時』A tizenkettedik óra をめぐる事件は、この当時の三者の関係を示すと同時に、作家と政府との橋渡しをするに至る動機をも示している。反戦的で平和主義的なこの喜劇は、自由主義的新闻や社民党の機関紙『ネープサヴァ』*Népszava* (人民の声)では誠実な作品と評され、左翼雑誌『コルンク』*Korunk*¹¹⁹⁾ (我等の時代)の批評も好意的であったが、ハンガリーの支配層や極右勢力の大きな憤激をかい、彼らから即座の禁止を要求された。ジラヒによれば、ゲムベシュから翌日呼び出された彼は、特に軍人がこの喜劇の禁止を求めていることを聞かされた。そこで、コズマは、11月の終わりにジラヒを擁護する手紙を首相に送った。手紙は、政府の文化政策のあるべき姿を説き、芸術家と政府とが良好な関係をもつよう勧めて、後のゲムベシュと作家との会談の素地を作った。手紙のなかで、コズマは次のように述べている。

「……問題の解決は検閲ではない。それは、ハンガリー人の才能ある作家や芸術家を集めて援助し、大きな目でハンガリーの諸問題を見つめるように指導できる人間が彼らに影響力を持つということにある。……愛国的な戯曲や文学を支配することはできない。……今日のハンガリーの民族主義的傾向の主な欠陥は、文学や芸術における不寛容と無理解である。私は、あなたがハンガリーの指導者と作家や芸術家との永続的関係の深化を行政の任務と考えておられると聞いて、大変喜んで……¹²⁰⁾。」

しかし、このコズマの見解は、この段階ではまだ個人的見解であり、人民作家との接触はまだ見られなかった。すでに述べたように、ネーメット・イムレやカンドーに仲介されて、コズマがネーメット・ラースローとイエーシュに会ったのは1934年の4月であった¹²¹⁾。

当時コズマは、農民の政治組織や政治運動に反対し文化的エリートによって達成される改革を提唱していたネーメット・ラースローに注目し、まもなく彼をラジオ番組の担当者に任命した。その後しばしば、コズマは、ネーメット・ラースローとイエーシュを夕食に招き、1934年の夏までに彼らとの関係を深めていた¹²²⁾。

116) U. o., 64-65 l.

117) 彼は、1932年のアメリカ旅行からの帰国後、しばしばゲムベシュを訪問し、英語を解さない首相のためにルーズベルト Franklin Roosevelt の本を読み聞かせていた (U. o., 80-81 l.)。

118) 創刊は1877年。

119) 発行期間は、1926年-1940年および1957年以降。同誌は、トランシルヴァニアで発行されたハンガリー語の進歩的・マルクス主義的社会科学・文学雑誌 (*Kislexikon*, 478 l.)。

120) Lackó M., “Új Szellemi Front”, 73 l. ジラヒを擁護するコズマの手紙は、しばらくの間ゲムベシュにこの喜劇の禁止を思いとどまらせた。しかし、それはまもなく劇場側によって、禁止の命令を待たずに自発的に上演プログラムから外された。

121) U. o., 74 l.

122) U. o., 80 l.

一方、ジラヒは、1933年の終りから『エシュト・ラポク』 *Est-lapok* (夕刊) の協力者および『ペシュティ・ナプロー』 *Pesti-napló* (日刊ペシュト) の論説委員として、新聞の発禁を恐れる新聞コンツェルンとゲムベシュとの間の調停役を担っていた。1934年2月1日からは、エシュト・コンツェルン *Est-konzern* の財政難に苦しむ日刊紙『マジャルオルサーグ』 *Magyarország* の編集主幹となり、編集委員にコドラーニイを、読書委員としてサボー・レーリッツを、論説委員としてバイチ=ジリンスキーとフェーヤを招いた。このような同紙の編集における変化は、ゲムベシュとエシュト・コンツェルンの協定の産物であった。後者は、これによって、国内外のファシズムの拡大という情勢やゲムベシュの政策への対応、さらには成長しつつある人民運動をその影響下に置くことをめざしていた。他方、前者は、人民作家の委員達によって同紙で扇動される社会改革や反ドイツ主義が彼の野心に奉仕するであろうと考えたのであった¹²³⁾。

第3節 新精神戦線

1934年の終りから、ゲムベシュの改革運動は新たな時代を迎えた。

ゲムベシュは、その首相就任当初から、支配層内において彼の支持基盤である「第三勢力」つまり軍人・公務員グループの優位を確立しようと努力していたが、これは次第にベトレンに代表される大貴族・大資本家の反感をかい、両陣営の対立が顕在化しつつあった。他方、この時期のハンガリーをめぐる国際情勢は、ハンガリーの小協商との対立の深化、それに対するドイツ・イタリアの傍観によって、ハンガリーを政治的孤立の方向に向けていた。こうしたなかで、知識人は、「民族的孤立」感を深め、またホルティは、「国内の統合」、「民族的目標」等のスローガンを掲げたゲムベシュの右翼的政策に期待感を抱くようになった¹²⁴⁾。

ところが、1935年にはいると国際情勢は変化した。1935年1月7日に締結されたイタリアとフランスによるドナウ協定は、政府に、イタリアのフランスへの接近の恐れを抱かせた。また1935年3月にドイツは再軍備を宣言し徴兵制を導入して、その反ベルサイユの立場を明確にした。したがって、ハンガリーの支配層が、その念願であるトリアノン条約の修正のためにドイツとの関係強化を求めたのは当然の成り行きであった。そして、こうした情勢は、ゲムベシュの支持基盤である中産階級右翼の勢いを増すとともに、反ドイツ分子に対する攻撃を強化することとなった¹²⁵⁾。

1935年の3月に総選挙を控え、自らの計画達成に余念のないゲムベシュは、まず反ドイツ主義の急先鋒で民族急進党 *Nemzeti Radikális Párt* の指導者バイチ=ジリンスキーを懐柔しようとした。そこで、ゲムベシュは1934年の12月頃から彼に接近し始めた。12月9日、民族急進党の機関紙『サバジャグ』 *Szabadság* (自由) の財政状態の悪化に関する相談のためにジリンスキーの家に彼の支持者が集まった。席上¹²⁶⁾、彼は先日ゲムベシュ

123) U. o., 81-83 l.

124) U. o., 108-110 l.

125) U. o., 111 l.

126) 出席者は、タマーシ、ネーメット・ラースロー、ジラヒ、イエーシュ、コドラーニイ、フェーヤ、サボー・レーリッツ、ネーメット・イムレ、ケルテース *Kertész Dániel* などの人民作家であった (U. o., 112 l.)。

の別荘に招待され夕食を共にしたことを告げた。この席でゲムベシュは、来るべき選挙や対外政策に触れ、彼の政策を支持するならば、『ブダペシュト・ヒールラフ』 *Budapest hírlap* の編集主幹の地位を彼に与えようと申し出た。その後、ゲムベシュは、議会の解散後の1935年3月に、彼に同調し反ドイツ扇動を止め民族急進党の候補者が選挙に与党の候補者として出馬するならば、議会の椅子をバイチ=ジリンスキーに保証するというメッセージを送った。しかし、ジリンスキーはこれを拒否し、ゲムベシュの改革約束を徹底的に批判した。したがって、彼は人民作家とは緊密な関係を保持していたが、後の人民作家とゲムベシュとの協調としての新精神戦線 *Új Szellemi Front* には加わらなかった¹²⁷⁾。

この一方で、人民運動をゲムベシュに接近させるためにコズマが策動していた。当時彼は、人民作家の「もっとも権威ある2人」であるネームット・ラースローとイエージュと親しくしていた。彼は1934年の終りにかけて、2人をしばしば自宅に招待し親交を深めていたのである。コズマは、1935年3月の初めに第二次ゲムベシュ内閣の内相となり、まもなく行なわれる選挙の準備にとりかかった。この一環として、彼は、人民作家をゲムベシュ政権の支持者として議会に送り込む計画をたてたのである。コズマは、人民作家のなかでもネームット・ラースローとイエージュを代表とすることを欲したが、2人はこの提案を受け入れなかった¹²⁸⁾。

コズマのこのような計画と活動は、ゲムベシュの「改革時代」をすでに心底から支持していたジラヒの活動と符合していた。彼の編集になる『マジャルオルサーグ』は、1934年の終りからゲムベシュの改革政策に奉仕し、彼への支持と改革の促進を主張した。そして、このキャンペーンにネームット・ラースローが加わった。彼は誰よりも1935年の改革運動の行方を注視し、1935年の初めには次のように書いた。「改革の仕事は最初からうまくいっていないことを私は知っている。闘う大衆もいなければ、闘うことのできる国家も存在しない。ただ大きな怠け者の官僚がいるだけである。……しかし、まさにこのために改革の信奉者はこの国家機構を獲得し、国のために利用せねばならない。……ハンガリーでは、今日、多くの教養ある人々が潜在している——どうか彼らを捜し求め、『頭脳委員会』に組織し、活気に満ちた公共生活の場に連れ出して欲しい。」そして、彼の雑誌『タヌー』の1935年の第1号の内容は、ほとんど完全に改革思想に関連していた¹²⁹⁾。

1935年3月31日から4月7日にかけて公開投票で実施された総選挙は、憲兵と行政当局の介入もあって、ゲムベシュの支持基盤である軍人・公務員グループの勝利に終わった¹³⁰⁾。

127) U. o., 112-116 l.

128) U. o., 116-118 l.

129) U. o., 118-120 l.

130) E. Pamlényi (ed.), *op. cit.*, p. 490.

選挙戦の期間中に政府系の新聞やラジオを使用して、候補者達は、「新しい一千年」、「新しい時代」、「改革時代」などを盛んに唱道した。選挙キャンペーンでは、社会的デマゴギーやベトレンの統治への批判、全体主義独裁の実現計画等が強調された。このデマゴギーは成功し、世論、特に知識人の一部と都市の小ブルジョアジーの間で、銀行資本や大資本と、人民の福利を欲し進歩を代表するという政府との対立を一時的にはあるが表面化させた。選挙戦は、ブダペシュトでは4月6・7日、地方では3月31日、4月3・4日に行なわれた。新たに選出された245議席の内訳は、民族統一党170、独立小地主党25、キリスト教経済社会党 *Keresztény Gazdasági és Szociális Párt* 14、社民党11、リベラル民主主義反対派 *Szabadelvű és Demokratikus Ellenzék* 7、ハンガリー民族社会主義耕作者労働者党2、民族急進党1、その他であった (Ránki, l. m., 710-711 l.)。

総選挙の1週間後、『ペシュト・ラポク』にジラヒの論文「新精神戦線を」“Új Szellemi Frontot!” が発表され、その2日後の人民作家とゲムベシュの出会いを予告した。この新精神戦線を宣言する論文において、彼は、今日作家と政府とがかつてのように相互に対立できなくなったことを強調した。そして、彼は、ゲムベシュとコズマが、「たとえば、10～12人の作家が選挙の候補になろうとすれば、それを受け入れたらろう」と述べた。さらに、「ハンガリーの精神生活の公的組織やフォーラムは新しい改革政策の支持に完全に適合しているので……生活の諸問題と闘う知的人間は、新しい精神戦線に結集せねばならない」として、政府を支援する知識人の結集を呼びかけた¹³¹⁾。

ジラヒの論文発表の2日後、1935年4月16日に、彼の別荘の書齋でゲムベシュと人民作家との初めての会談がもたれた。この出会いを正確に再構成することは今日不可能である¹³²⁾。一説によれば、この会談は、すでに総選挙で議会に選出され与党の一員となっていたネーメット・イムレがゲムベシュに提案し、ジラヒが仲介して実現したとされている。しかしジラヒの記憶では、ゲムベシュ自身が提案したことになっている¹³³⁾。後者の説は、当時の政治状況から妥当のようである。すなわち、テロルに基づいて行なわれた選挙は、1934年の終わりから1935年の春にかけての「改革時代」の支持者の間に亀裂を生ぜしめていた。ゲムベシュと小地主党の指導者エックハルト Eckhardt Tibor との間の同盟は解体した。また政府のバイチ=ジリンスキーに対する暴力的な選挙妨害は、彼の支持者を政府に対するもっとも先鋭な反対派に迫りやっした。さらに議会の構成も、改革政治をまじめに考えていた人々に不満を感じさせるものであった。こうした環境が、ゲムベシュに、一時的にはあるが影響力のある政治的要因に成長し、政府と対立する可能性もある人民作家への接近の必要性を認識させたのである¹³⁴⁾。

会談は、午後5時に始まった。出席者は、ゲムベシュとジラヒの他に7人（フェーヤの1941年の談話によれば8人）、すなわち、モーリツ・ジグモンド、ネーメット・ラスロー、イエーシュ、タマーシ、フェーヤ、サボー・レーリンツ、ネーメット・イムレ（フェーヤによれば、ケレク）であった。ゲムベシュは、紹介の後、一時間半しか同席できないことをあらかじめ詫びたが、これは会談が不成功の場合に備えてのものであった。しかし、実際には、ゲムベシュは午後8時まで滞在した¹³⁵⁾。

ジラヒによれば、出席者は最初誰も口を開かなかったが、ジラヒに促されてまずモーリツが農村の貧しい食事に関するメモを読み上げた。彼は、メモを読んだ後それをゲムベシュに渡して、政府が作家の意見をもとにこの状態を改善する気があるのかと問うた。しばらくの沈黙後、ゲムベシュはモーリツのこの態度が気に入らなかったのか、「ジガ、君は良くないことを言ったね。君は破壊的だ。」と答えた。これに対してモーリツは、手を振りながら鋭く反論したが、理解されないことを知ると、それ以後この会談の間じゅう沈黙

131) Lackó M., “Új Szellemi Front”, 124 l.

132) 会談について、二三の短く一般的な回想記の他、次のより詳細な談話が存在する。

Éjszakai beszélgetés Zilahy Lajossal, *Új látóhatár*, 1959, 4. sz.; Beszélgetés Németh Imrével, 1965; Beszélgetés Féja Gézával. 1971; Féja Géza, *Megjegyzések Lackó Miklós: Az Új Szellemi Front történetéhez c. tanulmányához*, 1972. (U. o., 166 l.)

133) ジラヒの前掲の夜話。

134) Lackó M., “Új Szellemi Front”, 132 l.

135) U. o., 126 l.

を守った。その後、話題はバイチ=ジリンスキーの選挙における敗北に移行した。この話題をもち出したタマーシとフェーヤ、それにイエージュは、ジリンスキーを強力に擁護したが、彼の名前を聞いた首相は顔をこわばらせた。その後彼は、ネーメット・ラーズローと話を始め、話題は再び転換した。出席者の一人、サボー・レーリッツは、終始だまっていたが、満足気に会話に聞き入っていた。その後、ジラヒが首相に、忍びで作家達とともに地方に出かけ議会でこの体験を述べたらどうかという提案をしたが、彼はこれを不可能であるとして斥けた¹³⁶⁾。

以上のようなジラヒの過去を「美化する」回想に比べて、フェーヤの回想はより現実的で正確である。それは、バイチ=ジリンスキーの敗北に関する議論も、サボー・レーリッツの「満足気な沈黙」も、またモーリツの「冷やかな沈黙」も、そしてジラヒの首相への提案の事実も述べているが、さらに詳しく会談の内容を記している。それによれば、上記の事実の他に、ケレクが植民について、イエージュが人民の全般的状態について、フェーヤが文化政策と人民教育の改革の必要性について語った。ゲムベシュは、肘掛椅子に座って作家達を注視したが、ほとんどだまっていたままであった。会談の間、作家もゲムベシュもかなり遠慮していたようである。こうして、作家達はかわるがわる話し、改革スローガンや要望を首相に聞かせたが、彼はただ静かな理解ある表情を見せるだけで、作家達に何の約束も与えなかった¹³⁷⁾。

この会談の状況から、会談がゲムベシュと作家達との真意の探り合いの場であり、両者の間で何らかの協定ないし同意が成立したとは考えられない。フェーヤによれば、すでに会談の終り近くの雰囲気は、作家達とゲムベシュとのより緊密な接触の可能性を否定するものであった。ゲムベシュは、モーリツの言葉と作家達のバイチ=ジリンスキーへの支持を不愉快に思い、翌日、コズマに「このことからは何も始まりはしない」と述べた¹³⁸⁾。

このように会談では実質的な合意に達することができず、それどころか一部の作家との間では溝が深まったかのような状況であったにもかかわらず、作家達は、首相に対する疑念を抱きつつもなお、新精神戦線形成のために、『マジナルオルサーグ』や『ペシュティ・ナブロー』で論文を発表した¹³⁹⁾。

まずジラヒが、4月21日に「開かれたカードで」“Nyilt kártyákkal”と題した論文を『ペシュティ・ナブロー』に発表し、新精神戦線を宣言した彼の1週間前の論文に対する左翼の批判に答えようとした。彼は、作家の「公共生活の闘いのための」権利を擁護し、新精神戦線が政府の道具であるとする非難を否定した。さらに、彼は、ベトレン派とゲムベシュ派との対立に言及して、現在進行している「目に見える政府」——ゲムベシュ政権——と、教会地主、大資本、世俗的大地主からなる「目に見えない政府」間の闘いにおいて、前者を支持すると述べた。そして最後に、新精神戦線の統一的な世界観を疑う批判に対して、人民的思想、すなわち「国家建設の任務は人民的勢力によってしか遂行できない」という思想と、「ゲルマンの膨張の危険性に対する闘いの思想」という基本的な点において

136) U. o., 126-128 l.

137) U. o., 129 l.

138) U. o., 129-130 l.

139) U. o., 130-131 l.

の合意が存在すると述べた。

ジラヒの論文が発表されて2週間以内に、イエージュ、コドラーニイ、サボー・レーリ
ンツ、シャルケジ、タマーツ、ナジ・ラヨシュ Nagy Lajos、フェーヤ、パプ・カーロ
イ Pap Károl、そしてネーメット・ラースローが、新しい精神戦線についての論文を新聞
に発表した¹⁴⁰⁾。

まずイエージュが、4月24日の『マジャーールサーグ』に論文¹⁴¹⁾を寄せた。この中
で、彼は、ハンガリー人民の滅亡とドイツ人の国内的・国際的危険性を繰り返し、ハンガ
リー人民のために様々な方向から新しい作家陣営が形成されたことを強調した。そして、
「我々のスローガンの最良の部分政府の公的プログラムの中に見出した」ことを喜んだ
が、作家が政治闘争に巻き込まれることを拒否した。しかし、この論文においては、作家
が政府の改革約束を信頼しているか否かについては触れていない¹⁴²⁾。

翌日、コドラーニイの論文が同紙に発表された。彼の論文は¹⁴³⁾、一連の論文のうちもっ
とも過激なもので、ドナウ河以西のハンガリー人の「滅亡」へ警鐘を発した後、最後に、
「我々が待望しているのは、我々を自分のものだと呼ぶ政府ではなくて、我々が自分のも
のだと呼べる傾向、あるいは援助の手である。もしこの傾向、この勢力がここに存在する
ならば、生命を蘇らせるために、死に絶えた魂の国とともに進もう」と述べた¹⁴⁴⁾。

4月2日に同紙に掲載されたサボーの論文は¹⁴⁵⁾、政府の改革政治の側に立つことを明白
に示したものであった。「今や、社会思想の宣伝の観点から、政府が……ハンガリー人の
社会的・文化的救済をほとんど意識的に表明したことをうれしく思う……」という書き出
しで始まる彼の論文は、運動全体の基本思想を次のように鋭く指摘している。すなわち、
彼は、左翼の概念も右翼の概念も時代遅れとなり、「垂直区分」はすでに「水平区分」・
「普遍的なハンガリー思想」への奉仕者に地位を明け渡したと考えた。それを彼は、「マル
クスからセゲドまで政党の相互にもつ垂直区分を、新しい認識、新しい感覚あるいは利害
共同体の力が貫く。この新しい認識・力とは、ハンガリー人滅亡の光景、ドナウ河以西に
おけるゲルマンの危険性、成長しつつある共同体感覚、青年の自我、ロシアのドグマティ
ズムから現実への漸次的移行の試み、人民的民族主義思想である。」と説明した。そして、
左翼も右翼もすでに古く実践的には効力を失ったと考えた¹⁴⁶⁾。

翌4月27日に出たシャルケジの論文は¹⁴⁷⁾、政府の政策には触れず、人民作家の集合

140) U. o., 131-132 l.

141) Illyés Gyula, "Reform és irodalom, Hozzászólás az új szellemi front vitájához", *Magyarország*, 1935, ápr. 24. という論文である。

142) Lackó M., "Új Szellemi Front" 132 l.

143) Kodolányi János, "Holt lelkek. Hozzászólás az új szellemi front vitájához", *Magyarország*, 1935 ápr. 25.

144) Lackó M., "Új Szellemi Front", 134-135 l.

これは、彼が論文の発表の直前に出身地オルマンシャークを訪れて感じたことであつた。この地方の住民は、かつてハンガリー人が支配的であつたが、この当時ドイツ人人口が増加し、ハンガリー人は少数派となりつつあつた (C. G. Gati, *op. cit.*, p. 107)。

145) Szabó Lőrinc, "Jobb'és, bal'és a reformok. Hozzászólás az új szellemi front vitájához", *Magyarország*, 1935, ápr. 26. という論文である。

146) Lackó M., "Új Szellemi Front", 135-136 l.

147) Sárközi György, "Polgár és paraszt. Hozzászólás az új szellemi front vitájához", *Magyarország*, 1935, ápr. 7. という論文である。

の理由を述べた。彼は、都市の市民と農民の連合を促した。それから作家グループの政治的態度について、簡単かつ一般的に、「思想のひとつでも実現しようとするまたは実現できる政党ならば、目に見えなくともまた政党の外にあらうとも共感を拒まない」と述べた¹⁴⁸⁾。

4月28日には、タマーシュが論文¹⁴⁹⁾を発表した。彼は、全体的にジラヒとの一致を強調し、「我々は、人民の価値と力の達成のために、人民の運命を改善する改革のために闘う精神的運動すべての支持者でありまた奉仕者である……」と述べている¹⁵⁰⁾。

ナジ・ラヨシュは、文学の自由と改革政治を支持する論文を4月30日に発表した¹⁵¹⁾。

翌5月1日に発表されたフェーヤの論文は¹⁵²⁾、人民作家が、右翼からも左翼からも一線を画す理由を述べている。その両者を、「右翼は、偽りの牧歌的な人民世界を創造し、左翼は、——フェーヤは、左翼を明らかに効力のなくなったブルジョア自由主義と同一視した——歪曲された民衆を人民の中に見出す」と評価した¹⁵³⁾。

ネーメット・ラースローが同じく5月1日に発表した論文は¹⁵⁴⁾、一連の論文の中でもっとも誠実かつ簡明に改革思想や政府との同盟の実現への信頼を表明したと同時に、また否定的な徴候をも見出してその実現への懸念をも表わしていた。彼は、新精神戦線について次のように述べている。すなわち、「幾人かの政府の人間が幾人かの作家との話合いに降りて来た。作家達は、公的な要求を権力者に伝えるとともに、同じものを民衆に伝えた。」と。そして彼は、政府が新しい精神戦線を買収したという批判を否定した。さらに彼は、新しい作家のグループ形成は改革の早急な必要を強調しており、ここ数カ月間に「夏の夕立のごとく権力の口から色良い言葉を得た」と述べた。そして最後に彼は、最近数年間左翼と対立している文学と右翼と対立している政治家の1グループが相互に接近したが、政府はまだ何も実行しておらず、作家グループがさらに政府と共同するかどうかはしばらく静観して検討せねばならないとして、政府に対する期待と懸念を表明していた¹⁵⁵⁾。

そして最後に、ハンガリー人の純血性とその解体された絆に関するパプの論文が5月2日の『マジャルオルサーグ』に掲載された¹⁵⁶⁾。これを最後に同紙における人民作家の新精神戦線論の展開は終わった。

この間、5月1日の社民党機関紙『ネーブサヴァ』は、「改革を！改革を！改革を！政治家・学者・作家およびその他の公人の最近の疑問についての見解表明」と題した論文を

148) Lackó M., “Új Szellemi Front”, 133 l.

149) Tamási Áron, “Népi szellemet a Duna mentén. Hozzászólás az új szellemi front vitájához” *Magyarország*, 1935, ápr. 27. という論文である。

150) Lackó M., “Új Szellemi Front”, 132-133 l.

151) Nagy Lajos, “Az irodalom szabadsága. Hozzászólás az új szellemi front vitájához”, *Magyarország*, 1935, ápr. 30., Lackó M., “Új Szellemi Front”, 134 l. に引用がある。

152) Féja Géza, “A magyar író feladatai. Hozzászólás új szellemi front vitájához”, *Magyarország*, 1935, máj. 1. という論文である。

153) Lackó M., “Új Szellemi Front”, 134 l.

154) Németh László, “Író és hatalom. Hozzászólás az új szellemi front vitájához” *Magyarország*, 1935, máj. 1. という論文である。

155) Lackó M., “Új Szellemi Front”, 136-137 l.

156) Pap Károly, “A beolvadásról. Hozzászólás az új szellemi front vitájához”, *Magyarország*, 1935, máj. 2. Lackó M., “Új Szellemi Front”, 133 l. に引用がある。

発表した。この一種のアンケートは、改革政治や労働運動の役割に関する人民作家の見解とそれに対する左翼の代表の意見を載せていた¹⁵⁷⁾。

まずバイチ=ジリンスキーが、300万ホルド以上の土地改革の必要性を強く主張した。イエージュは、労働者にとって労働組合は必要であるが、農村における組織化は何も解決をもたらさないと声明した。コドラーニイは、これに関連して労働組合の進歩的役割を認め、農村にそれが存在しないことを残念がった。その他、サボー・レーリッツとジラヒがこのアンケートに答えた¹⁵⁸⁾。

それと同時に、ジョルト・ベーラ Zsolt Béla やイグノトッシュ・パール Ignotus Pál 等の急進的民主主義者の人民作家に対する批判も掲載された。そして最後に、ヴェレシュが、改革運動に関する「生粋の社会主義者」の当時の見解を要約して次のように述べた。すなわち、ハンガリーでは、問題を解決できるのは、改革願望ではなくて、社会主義だけであることを強調したのである¹⁵⁹⁾。

人民作家の『ネープサヴァ』への返答は、明らかに示威的目的でなされていた。これによって、「作家グループは、単純に政府と結合したのでも、また一面的な関連をもったのでもないこと、さらに作家の多くは、社会主義的労働運動の過去の長所を承認するために、しかし現在は社会民主主義のためではなく、労働組合運動のために闘うつもりであることを証明しようとした。」¹⁶⁰⁾

以上の言明は、結局、ジラヒと新精神戦線に対する作家達の支持を表わしていたが、同時に個々の作家間の思想的相違をも露呈させていた。

しかし、このような論文に示された作家達の新精神戦線への期待の背後で、徐々に疑惑と不信が強まりつつあった。ゲムベシュの約束が実現される気配はなかった。また、左翼からは、その後も次々と新精神戦線と改革思想に対する批判があびせられていた¹⁶¹⁾。

こうしたなかで、5月から6月にかけて、人民作家達は一部は失望して沈黙し、またある者は批判に対して防衛的な正当化を述べていた。たとえば、フューヤは、この時期に、政府の植民計画のいい加減さを鋭く批判し、「土地改革の思想、したがってもっとも焦眉の問題が政治日程から外された」と述べた。しかし、彼自身終始民族急進党の支持者であったように、人民作家は政府の側に立っていないと弁明した。さらに、左翼に対しては、「農民を国家の中軸および経済力の第一級の保有者とすることに同意するのか」との質問を発し、人民と農民に依拠する人民作家の思想の正当性をますます強く確信するようになった¹⁶²⁾。

そして、最終的には、後にネームット・ラーズローが回想したように、「5～6月に明らかとなったことは改革からは何も望めない」ということであった。こうして、コドラーニ

157) Lackó M., "Új Szellemi Front". 137 l.

158) U. o., 137-139 l.

159) U. o., 139-140 l.

160) U. o., 140 l.

161) 『ネープサヴァ』のアンケートにおける批判の後も、イグノトッシュやヨーゼフ、ウーイヴァーリ Újvári László, パーリント Bálint György などが、作家達の声明や改革運動の分析と批判を新聞に発表した (U. o., 143 l.)。

162) U. o., 144-145 l.

イとサボー・レーリンツを除いて、作家達は、新精神戦線の失敗を認め、「ハンガリーの中産階級の社会的役割に対する幻想」を捨て、社会変革には人民の参加が不可欠であることを認識するに至った¹⁶³⁾。この経緯を、シャルケジの1年後の論文はよく表わしている。彼によれば、人民作家は、ゲムベシュの来るべき改革計画を聞かされた時、政府に希望を見出したのではなく、改革にそれを見出した。しかしまもなく、改革の成果が期待できないことがわかると、人民作家は失望し政府と対立した。しばしば共産党系の雑誌『ゴンドラト』*Gondolat* (思想, 1935年-1937年)に投稿していたシャルケジが『ヴァーラス』の編集者になったことは、人民作家の主流と政府との対立を予測させた¹⁶⁵⁾。

以上のように、1935年春のゲムベシュの「改革政治」を支持する一形態としての新精神戦線の試みは失敗した。ラツコーは、人民作家の新精神戦線への歩みを、社会改革を自己の使命と考える知識人と、政治において発言力を強めることによって自分達の社会的不満を解消しようとする中産階級との接近という側面から説明している。中産階級は、人民と国家の運命に敏感に反応し、保守的な体制のなかで伝統的支配層と対立し、しかも「伝統的左翼」と反革命体制の危機のなかで強力な政治的・社会的代表をもたなかったため、第三勢力としての極右的な軍人・国家公務員グループに不満の解消を託した。一方、人民運動の側では、このような中産階級と結びつくことによって、極右グループを変革し、自らが指導権を握って急進的な改革を達成しようとした。これを促進したのは、右翼の改革デマゴギーと共鳴する、人民運動に固有な大土地所有制への一貫した反対、反封建、急進的な人民概念等であった¹⁶⁶⁾。

以上のように、本来、人民のために改革を施すつもりのもったくないゲムベシュ政権との結合を意図した新精神戦線は、必然的に失敗に帰した。ゲムベシュにとっては、新精神戦線という名の作家の支持は、一時的にはあるが彼を支持する世論の形成を助けるものであった。一方、政府と極右勢力の無為に大きな失望を感じた人民作家の多くは、この経験を踏まえて、運動を新たな段階へと導いていった。要約すれば、新精神戦線は、人民運動の歴史において、20年代から30年代初めにかけての世論への告発活動の時代から、改革のために政府に直接働きかけるという運動の第二段階を示している。この試みは、結果として失敗したとはいえ、人民作家に改革は政府に直接働きかけるのではなくて、逆に人民の側に働きかけることによって達成されるという認識をもたらした。そして、これが、次の段階、すなわち真に人民のための改革を欲する全野党および人民を結集して下からの改革を目指す三月戦線 *Márciusi Front* への踏み台となったのである。

第3章 三月戦線

第1節 三月戦線の形成

新精神戦線失敗後の人民運動は、コミンテルンの人民戦線政策への転換や、フランス、

163) U. o., 144 l., 146 l.

164) この論文は『ゴンドラト』の1936年4月-5月号に発表された (C. G. Gati. *op. cit.*, p. 111)。

165) *Ibid.*, p. 111.

166) Lackó M., “Új Szellemi Front”, 149-151 l.

スペインにおける人民戦線の成立に刺激された国内の左翼に支援されて、運動のもっとも活動的かつ重要な時代にはいっていった。

国内政治においては、1936年10月6日にゲムベシュが突如死亡した後、彼の親ドイツ政策および全体主義確立の努力、さらには極右勢力の保護を危険視し始めていた摂政ホルティは、ベトレン派からの突き上げもあり、その揺り戻しとしてダラーニイ Darányi Kálmán (1936年10月12日-1938年5月13日)を首相の座に据えた。政権に就いたダラーニイは即座に反極右キャンペーンを開始し、ファッショ政党である民族社会主義労働者党 Magyar Nemzeti Szocialista Munkás Párt (通称、鎌十字 Kassaskeresztesek)の指導者ベセルメーニ Bősörmény Zoltán¹⁶⁷⁾を逮捕するとともに、同党の活動を禁止した。また1937年4月15日には、同じくファッショ政党である民族意志党 Nemzeti Akarat Pártjaの活動を禁止し、指導者サーラン Szálasi Ferenc¹⁶⁸⁾を逮捕した。

経済的には、ハンガリーは、この頃までに世界恐慌の影響を徐々に克服しつつあったが、その過程で、ドイツの経済的浸透が進んでいた。その一端は、1934年2月に締結されたハンガリー・ドイツ貿易協定以後拡大したドイツのハンガリー貿易に占める割合に現われている。1937年のハンガリー貿易に占める対独輸出は、24.1パーセントであり、対独輸入は26.2パーセントであったが、それは1933年時の割合から、それぞれ約10パーセントも増大していた。その後、これらの割合は増え続け、1939年には、それぞれ52.4パーセント、52.5パーセントを占めるに至るのである¹⁶⁹⁾。

このような状況下で、新精神戦線に失敗した人民作家は、ある者は運動の隊列を離れたが、ある者はさらに活発な文学活動を展開していった。前者の例として、ネーメット・ラーズローはしばらく公的生活から退き、グヤーシュとネーメット・イムレは運動から離れ、コドラーニイは政治活動に専念した。一方、1935年頃から『ヴァーラス』の編集者となったジャールケジを初めとする若い世代が抬頭してきた¹⁷⁰⁾。

まず、ヴェレシュは数多くの論文を雑誌に発表するとともに、1936年に『アルフェルド

167) ベセルメーニは、没落地主の息子で、1919年の反革命参加後、ブダペシュト大学に入学し、在学中に愛国的学生団体のリーダーとなった。1931年にドイツに渡り、帰国後1932年にハンガリー民族社会主義労働者党を結成した。同党は、大土地所有制が支配的な東部ハンガリー大平原の農民の間で急速に人気を得た (István Deák, "Hungary", in H. Rogger and E. Weber, *The European Right: A Historical Profile*, London, 1965, p. 384)。

168) サーランは、最初、将校を主な構成者とするグループを基礎に、民族意志党を結成した。その暫定的綱領の主なものは、

1. 祖国のかつての威信の回復
2. トリアノン条約の重荷の軽減
3. 非ファッショ諸国からの一時的借入金の軽減
4. 国民主として農民の負債の国家による棒引き
5. ユダヤ人信用経済の根絶
6. 純粋なハンガリー人の信用組織の設立

などであった。サーランはその後、1936年の秋にドイツへ旅行した後、労働者階級の組織化に着手し、1937年春に党が禁止された時には、党員数は2000-3000人を数えた (M. Lackó, *Arrow Cross Men National Socialists 1935-44*, Budapest 1969, pp. 13-14. 以下 *Arrow-Cross Men* と略す)。

169) I. T. Berend and Gy. Ránki, *Economic Development*, pp. 281-282.

170) C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 114-115.

の農民』 *Az Alföld parasztsága* を出版した¹⁷¹⁾。彼は、生涯自分の村を離れることなく農民の生活を書き綴った¹⁷²⁾。またコヴァーチは、「半御用的な」月刊誌『マジャル・セムレ』 *Magyar szemle* (マジャル評論) その他に投稿するとともに、1936年の夏に政治家のマトルチといっしょに地方に赴いて集めた資料に基づいて、大きな評判を呼ぶことになる『静かなる革命』 *A néma forradalom* を1937年に発表した¹⁷³⁾。彼は、すでに1935年に、オルマーンシャーク *Ormánság* で行なった調査をもとに一子制問題を取り上げ、大土地所有制を攻撃していた。重要なことは、この報告のなかで、農民階級のなかのはっきりした社会層として農場労働者を初めて取り上げたことである。1937年に出版した『静かなる革命』では、一子制や移住、宗派の問題が取り上げられている¹⁷⁴⁾。さらに、ダルヴァシュも『ヴァーラス』や『ゴンドラト』、『ネーブサヴァ』や『ソツィアリズムシュ』¹⁷⁵⁾ *Szocializmus* に投稿していた¹⁷⁶⁾。彼は1937年に、出身地オロシュハーザに関する証言『ハンガリー最大の村』 *A legnagyobb magyar falu* を出版した¹⁷⁷⁾。またイエーシュは1936年に、自叙伝風の小説『プスタの民』 *Puszták népe* を発表した。彼はこの本において、封建遺制に精神的物質的に呪縛され、退嬰的で旧態然たる生活を送る大農場の労働者を批判的に描写した¹⁷⁸⁾。彼は、この頃までに運動内で確固たる地位を占めるようになっていた¹⁷⁹⁾。

1936年に出版されたイエーシュの『プスタの民』に寄せられた高い評価は、シャルケジに「社会学的文学」への高い関心の存在を確信させ、さっそく『ヴァーラス』において「ハンガリーの発見」と題する地方の社会的・経済的・政治的報告シリーズの連載を企画させた。こうして、翌年10シリーズとして、フェーヤの『嵐のコーナー¹⁸⁰⁾』 *Viharsarok* と、エルデイの『流砂』 *Futóhomok*¹⁸¹⁾、サボー・ゾルターンの『裕福にみせかけた貧困』

171) Ibid., p. 115.

172) A. Cohen, *op. cit.*, p. 65.

173) C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 115-116.

174) A. Cohen, *op. cit.*, pp.58-60.

『静かなる革命』はパラヴィツイニ Pallavicini 伯爵家の領地の状態を表わすと共に、15世紀初めからの農民史を描いている。それによれば、15世紀のドージャ Dózsa György の反乱以来、民族は貴族と農民に分裂し、前者は土地とすべての権利を所有して民族 *nemzet* を構成してきたのに対し、後者は土地も権利も奪われて人民 *nép* を構成してきた。こうした状況に対する農民の反乱はことごとく鎮圧され、最後に残された反乱形態こそ、移住や、現実からの逃避としての宗派、民族の滅亡を招く一子制という静かなる革命であった。

175) 同誌は、社民党の社会科学雑誌で、1906年から1938年の間発行されていた (Révai József, *Révai József válogatott történelmi írások*, II kötet, Budapest, 1966, 506 l.)。

176) C. G. Gati, *op. cit.*, p. 116.

177) A. Cohen, *op. cit.*, p. 63.

178) Illyés Gyula, *Puszták népe*, Budapest, 1966 (ドイツ語訳 *Pusstavolk*, Budapest, 1969.), 邦訳, 加藤二郎訳, 『プスタの民』, 法政大学出版会, 1970年)。

179) C. G. Gati, *op. cit.*, p. 118.

1931年から1936年までにイエーシュはハンガリー最高の文学賞バウムガルテン Baumgarten 賞を4度受賞した。

180) この本は、「嵐のコーナー」という数多くの農民反乱の歴史をもつハンガリー南東部の一地方の農民生活を記したものであった (A. Cohen, *op. cit.*, pp. 60-61)。

181) 『流砂』は人民作家の著作のうちでもっとも非文学的な作品で、ドナウ河とティサ河間の地域、大平原などの18世紀以来の歴史を叙述している (Ibid., pp. 62-63)。

Cifra nyomoruság の3報告が発表された。ところが、フェーヤの報告は、当局の怒りに触れ彼が裁判にかけられるに至って、このシリーズは中断を余儀なくされた。しかし、人民作家の多くは、依然として地方での資料収集を続けた¹⁸²⁾。この時期に発表された以上の作品は、農村の物質的・文化的疲弊や貧農の苦悩を表現しており、後進的な大土地所有制に対する告発の書であった¹⁸³⁾。

人民作家達は、上記のように、それぞれが雑誌その他を通して精力的に言論活動を続けつつ、定期的に¹⁸⁴⁾ブダペシュトのカフェ・ツェントラルに集まっていた。定期的にここに集まった者は、フェーヤ、イエージュ、コドラーニイ、コヴァーチ、シャルケジ、サボー・レーリツ、タマーシ、不定期には、ヴェレシュヤジラヒ、エルデーイ、シンカ、サボー・パール Szabó Pál、ネーメット・ラースローが訪れていた。この会は、1937年の初めまでにかなり大きなものになり、デブレツェンの大学サークルの指導者を初めとする若い左翼知識人も数多く参加するようになっていた¹⁸⁵⁾。彼らの多くは、共産主義者で、運動の企画や組織化に携わるようになっていた¹⁸⁶⁾。これに先立ち、共産党は、1936年6月にハンガリーにおける人民戦線政策を発表しており、彼らの人民運動への参加はこの共産党の政策を反映したものと思われる¹⁸⁷⁾。上記の定期会合の席で、来る3月15日に1848年革命を記念する行事を行なうことが決定された。こうして作家達は、ブダペシュトの大学サークルによって国立博物館前における祝賀会に招待された¹⁸⁸⁾。

1937年3月15日、国立博物館前の広場に、主として学生からなる5000人の聴衆が集まって集会が開かれた。ここで、ジラヒ、フェーヤに続いて演壇に立ったコヴァーチは、あたかも89年前の日その場でわき上がった革命的情熱を再び呼び起そうとするかのように12項目からなる要求を宣言した¹⁸⁹⁾。これによって、民主化を求めるすべてのハンガリー人の結集の場「三月戦線」A Márciusi Front が成立した。

綱領の内容を印刷したパンフレットは次のように述べている。

「……我々は、1848年3月に実現しなかった精神的遺産を再び取り上げて要求する。

(1) 国家の民主的変革

182) C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 116-117.

183) Kállai Gyula, *A magyar függetlenségi mozgalom 1936-1954*, Budapest, 1965, 64 l.

184) 毎週水曜日の午後5時からと決められていた (C. G. Gati, *op. cit.*, p. 118).

185) デブレツェンの青年グループと人民作家との関係は、コヴァーチによれば、1936年の初めに彼らから招請されて集会が開かれたことに始まる。この中には第二次世界大戦後「民族主義的」共産主義者として現われたカーライ Kállai Gyula, ロシヨンツイ Losonczy Géza, ウーイヘイ Újhelyi Szilard, ドナート Donáth Ferenc, セルド Zöld Sándor, スイラジ Szilagyi József, キシュ Kiss József がいた。彼らは、1956年の事件の後、修正主義者として非難・投獄あるいは処刑された (C. G. Gati, *op. cit.*, p. 119).

186) *Ibid.*, p. 124.

187) Kállai Gyula, *I. m.*, 64 l.

188) C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 118-120.

189) フェーヤは、後にこの宣言発表の経緯を次のように述べている——「集会の前に誰かが我々に12項目の要求書を渡し、我々はこれに同意した」(C. G. Gati, *op. cit.*, p. 125)。このように12項目の要求は作家達の作成によるものではない。しかし、この「誰か」が共産党員であったという証拠はなく、作成者はわからない。こうして作家達はすでに作成された要求を受け入れるという形でいわば受動的に三月戦線に結集した。しかしながら後の三月戦線の活動の内容からわかるように、戦線への結集の形はどうであれ人民作家達が指導的役割を果たしたことはまぎれもない事実である。

- (2) 思想・言論・出版・集会・結社の自由
- (3) 普通・平等・秘密・非制限選挙
- (4) 国会議員が経営や利害代表などのメンバーとなることができないような国会議員の兼任禁止の完全な遵守
- (5) 500ホルド以上の所有地の収用
- (6) ハンガリー人を疲弊させる銀行・カルテル・独占の支配の停止
- (7) 累進課税の導入
- (8) 労働を望むすべてのハンガリー人のための仕事：精神的・肉体的労働の双方における週40時間労働の導入および数職兼務と莫大な収入の禁止
- (9) 生物学的生存水準以上の最低賃金の確立
- (10) 労働者の経済的組織化の自由
- (11) より低い人民階級のための中・高等学校における累進的授業料制度と質的選抜制の導入
- (12) ハンガリーの国境修正：ドナウ河流域人民の善隣関係の問題における自決権の尊重、汎スラヴおよび汎ゲルマンの帝国主義的野心に対するドナウ河流域の主権と連邦思想の実現

この非人間的で非ハンガリー的な世界において、我々人民の権利を擁護するにはこのようにしか考えられず、また我々が、最初の3月の精神的信奉者であり続けると強く信じている。三月戦線¹⁹⁰⁾」

コヴァーチがこの宣言を読み終えるやいなや、聴衆は熱狂的に「三月戦線よ永遠に！人民的ハンガリーよ永遠に！」と叫んだ¹⁹¹⁾。

この綱領に一貫した特徴は、ハンガリーにおける一般民主主義の要求である。従来、貧農と農業労働者だけの改善を求めていた人民運動が、これによってすべての被搾取者のための民主的変革の要求をも考慮し、とりわけ労働者階級の状態の改善に同意した。これは、人民運動が民主化運動として一步進んだことを示している。しかし、綱領の12番目の要求は、今日議論を呼ぶところである。党史研究所から出されている『ハンガリー革命的労働運動史』*A magyar forradalmi munkásmozgalom története* (1970年)は、この綱領の民主的性格を評価しつつも、12番目の項目に関して、人民作家の見解は民族主義的影響力から免れえないとして否定的見解を付け加えた¹⁹²⁾。これに対してコーヘン Asher Cohenは、この12番目の「汎ゲルマン的、汎スラヴ的帝国主義の拒否は、民族独立、下層階級の相互依存、フマニズムと共産主義の完全な拒否と結合していることでしか理解できない」として、否定するどころか反対に中東欧人民の共通の運命という広い視野に注目している¹⁹³⁾。ともあれ、全体としてこの綱領は、民族主義に席卷され、共産主義あるいは社会主義が徹底的に弾圧され、民主主義の封じられていた戦間期のハンガリーにおいて、全被搾

190) "A népi írók és a baloldali diákfiatalok bejelentik a Márciusi Front megalakulását és programját", 1937, márc. 15, *A Magyar népfront története dokumentumok 1935-1976*, (以下 *Dokumentumok* と略す) Budapest, 1967, 100-101 l.

191) C. G. Gati, *op. cit.*, p. 122.

192) Nemes Dezső (szerk.), *A Magyar forradalmi munkásmozgalom története*, Budapest, 1970, 442 l.

取人民および民主主義を望むすべての人々のための綱領としてふさわしいものであったといえよう。こうして人民作家達は、新精神戦線の時代から進んで、人民を動員し政府と対決して民主主義的変革を達成しようとする「下から」の変革活動の時代に移行した。

そして、発表された12項目にわたる綱領をもとに作家達は、新たに各地で集会を開くなど、改革のための扇動活動を開始した。第2節では、戦線の具体的活動を述べる。

第2節 三月戦線の活動

三月戦線の執行委員会は、エルデイ、フェーヤ、イエーシュ、コヴァーチ、ヴェレシュによって構成された。そして、委員会は最初に、この戦線が政党形態をとらず¹⁹⁴⁾知的潮流であること、ならびに『ヴァーラス』を運動の機関紙とし、人民主義者達は各地の人民に彼らの思想やプログラムを伝えること等を決定した¹⁹⁵⁾。このことは、政治活動や政府への批判が著しく制限されていた当時のハンガリーにおいては、政党では不可能な影響力を運動に付加するものであった¹⁹⁶⁾。

戦線の活動は、最初はそれほど活発ではなく、カフェ・ツェントラルでの会合が主であった。ところが、1937年4月13日に突然、フェーヤが、彼の『嵐のコーナー』による「階級扇動」のかどで逮捕された。翌4月14日、今度はヴェレシュが、『コルンク』における彼の研究発表によって共産主義者の疑いをかけられ逮捕された¹⁹⁷⁾。フェーヤは同年の夏に、「雇用者と土地所有階級に対する労働者階級の憎悪を助長した」かどで告発され、彼の残りの本を没収されるとともに5カ月の懲役を受けた¹⁹⁸⁾。同じ頃、コヴァーチの『静かなる革命』の第三版が当局に没収され、彼は3カ月間投獄された。またイエーシュも、新しい詩集『壊滅しつつある秩序』*Rend a romokban* を警察に押収された¹⁹⁹⁾。

このような人民作家に対する当局の弾圧は、彼らに共鳴する知識人や大学生の間で政府に対する非難を高まらせた。1937年5月19日付けの『ネープサヴァ』は、ヴェレシュやフェーヤ、エルデイへの当局の迫害に対する1000人以上もの大学生の抗議の記事を載せている²⁰⁰⁾。その他、この年の暮までに、バルトクやモーリツ、ジラヒなどが署名した抗議の手紙が『ヴァーラス』に続々と寄せられ、11月の初めには議会でもこの問題が取り上げられた²⁰¹⁾。

これと並行して、三月戦線は、デブレツェン、マコー Makó, ベーケシュチャバ Béke-scsaba, ジュラ Gyula, ケチケメト Kecskemet, セゲド, ジェール Győr その他で集会

193) A. Cohen, *op. cit.*, p. 108.

194) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 844 l.

195) C. G. Gati, *op. cit.*, p. 126.

196) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 844 l.

197) フェーヤとヴェレシュは、1921年に施行された法律第3号 (Law No. III) の、ハンガリー国家およびハンガリー民族を誹謗中傷するような論文・書籍の出版禁止という条項に違反する嫌疑をかけられて、逮捕された (C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 127-128)。

198) この刑は後に2カ月に減刑されたが、彼はこれによって高校教師の職を失った (Ibid., p. 128)。

199) Ibid. p. 128.

200) "Egyetemi hallgatók tiltakozása a népi írók zaklatása miatt", *Népszava*, 1937, máj. 19 (Dokumentumok, 104 l. にある)。

201) C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 128-129.

を開いた。集会は、地方のホテルやクラブの大ホールで開かれ、主として農民が参加していた。コヴァーチは、これらの集会に参加した農民について、「農民達は心配そうにじっと聞きいていた。彼らのまわりには荒廃感が漂い、彼らの態度全体は、彼らが明らかに忍耐の限度に達し、変化を切望していることを示していた。ふり返ると、私は今なお三月戦線のそのような集会における抑圧された緊張感の漲った雰囲気をほとんど思い出さなければならぬ。……」と語っている²⁰²⁾。

これらの集会のうち、大きなものは、ブダペシュトとマコーで開かれた。エルデイとドナートに導かれる3人のデブレツェンの大学生によって準備された²⁰³⁾マコーの集会は、1937年10月の初めに、社民党や独立小地主党その他の代表など反ファシヨ的な公人も参加して開催された²⁰⁴⁾3月15日以来初めての大きな動きであった。1937年10月5日付けの『ネーブサヴァ』は、「三月戦線、マコーの大集会の宣言においてその要求の誓約を強化」と題した記事を掲載した。それによれば、この集会は、社会の全階層の大きな関心を呼び、郊外からもまた遠くティサ河以東からも代表がやって来て作家の話に耳を傾けた。集会では、まず全体テーマ「国と文学」に基づいて、シャルケジが三月戦線の作家の運動について語った。次に、コヴァーチが「ハンガリーの大地」、ヴェシレシュが「労働者と文学」、エルデイが「農民と文学」、フェーヤが「ブルジョアジーと文学」とそれぞれ題した講演を行なった。またイエーシュは、聴衆の嵐のような喝采のなかで文学的使命について語った。それから、三月戦線の名で、エルデイ、フェーヤ、イエーシュ、コヴァーチ、ヴェレシュが署名した12項目の宣言を再び全国の人民に向けて発表した。そして、ここでは特に、12項目のうち、ハンガリー人すべてに拡大された選挙権と自由権の要求が日程の最初に掲げられ、選挙権に関する短いパンフレットが配付された。フェーヤは、このマコーにおける三月戦線の宣言について、次のように語っている。

「我々の集会は、日常的な政治闘争に介入するのではなく、その本来の思想に従って、ハンガリー社会の歴史的責任感を覚醒させ、ハンガリー共同体に指導的思想を提示することを表明した²⁰⁵⁾。」

すなわち、フェーヤによれば、集会の活動は政治的なものではなく、人民の変革意識を覚醒させることであった。この記事のなかで、『ネーブサヴァ』は、マコー宣言について、「三月戦線は、人間性および平等な権利と義務を基礎とした人民的民主主義 *népi demokrácia* を切望していることを証明した」と評し、12項目の内容も同時に掲載している。しかし、ユダヤ人問題に関しては、宣言が「社会的変革の必要性から注意をそらすために」この問題を取り上げていると批判した²⁰⁶⁾。

その後、11月2日にはブダペシュトの音楽アカデミーの広い講堂で、1000人~1200人の聴衆を集めて『ヴァーラス』の文学興業という形の集会が開かれた。この集会ではまず

202) Ibid., pp. 129-130.

203) Ibid., p. 31.

204) Pölöskei F. és Szakács K., *Földmunkás - és szegényparaszt - mozgalmak Magyarországon 1848-1948*, Budapest, 1962, 927 l.

205) U. o., 927 l.

206) "Márciusi Front Makói nagygyűlése kiáltványban erősíti meg követeléseinek vállalását", *Népszava*, 1937, nov. 4 (*Dokumentumok*, 116-118 l. にある)。

タマーシが、反軍的傾向の短い物語を読み、次にジラヒが新精神戦線の活動をふり返った。その他、この会には、エルデイ、ケレク、マトルチ、ネーメット・イムレ、ヴェレシュ、フォドル Fodor József, サボー・レーリッツ、イエーシュ、フェーヤ、コヴァーチ等が参加していた。聴衆は、「三月戦線よ永遠に！」と叫びながら帰途についたと、警察報告は述べている²⁰⁷⁾。

その後、ヴェレシュが、ジュラやベーケシュチャパで彼の本の朗読会を開いたり、あるいは幾人かの作家がチェコスロヴァキアの諸都市をまわりハンガリー人少数民族に人民作家の思想を紹介した。また社会民主党や労働組合内にフェーヤやコヴァーチへの判決に対する抗議書が回され、全国学生連合は三月戦線との協力を決定した²⁰⁸⁾。

運動の中心機関としての役割は、三月戦線の知的潮流としての性格を反映して『ヴァーラス』が担った。『ヴァーラス』は多くの作家の投稿を掲載するとともに、運動の活動を定期的に報告した。その他に三月戦線の精神を反映する雑誌として、1937年11月にコヴァーチとポトツキー Potoczky Kálmán が『ヒード』Híd (橋) を、1938年3月にはデブレツェンの左翼知識人が『トヴァーブ』Tovább²⁰⁹⁾ (前進) をそれぞれ創刊した²¹⁰⁾。

このような集会や個人的活動、または雑誌を通じて、三月戦線は農村においても反響を呼んだ。それを『トヴァーブ』に寄せられた地方からの手紙によって知ることができる。たとえば、デレチケ Derecske からの手紙は、

「自覚したハンガリー農民は、今日すでに矢十字²¹¹⁾の妨害に厳しくむちを振って……立ち、この闘いのなかで自覚した農民を常に自分の隣に発見することができる。」

と述べている。また、ニレジハーザ Nyiregyháza からの手紙は、

「我々工業と農業の労働者は、……『トヴァーブ』と三月戦線との完全な共同歩調を表明する。」

と述べている。このように、運動は、矢十字のデマゴギーや政府の偽りの改革案に惑わされない農村の諸層から支持を受けた²¹²⁾。

こうして運動は活発化していたが、その一方で運動内の対立が顕在化しつつあった。運動はこの頃までに、イデオロギー的に3つのグループに分けられるようになっていた。

まず(1)急進的左派を構成したのは、ダルヴァシュ、エルデイ、イエーシュ、オルトウタイ、ヴェレシュであった。彼らは、合法・非合法の党活動を遂行し、マルクス主義によって農民と民族の運命を解決することを希望した。彼らには、農民出身という共通の意識が強く流れていたが、歴史形成の能力を農民だけが有すると考えるのではなく、全労働者階級の連合こそ変革を可能にすると考えた。そして、変革のために民族主義とマルクス

207) C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 132-133.

208) *Ibid.*, pp. 134-135.

209) 発行されたのは全部で3号、すなわち、1938年の3月号、5-6月号、9月号だけであった。編集者は、キシュ、ウーイヘイ、ゼルドであった(Révai József, I. m., 506 l.)。

210) C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 134-135.

211) 矢十字運動は、主としてサーランの下に、1938年から1939年にかけて、様々な群小ファッショ勢力が統一されて矢十字党 Nyilaskeresztes Párt に組織された。同党は、1939年の選挙において、16.2パーセントの得票率を得た(M. Lackó, *Arrow-Cross Men*, p. 70)。

212) Pölöskei F. és Szakács K., I. m., 928 l.

主義的社會主義との綜合を試みた²¹³⁾。

次に(2)中間派の思想は、ネーメット・ラーズローによって代表される。他に、フェーヤやサボー・パールがこの派に属していた。中間派と左派との間の原則的対立は深いものではなく、むしろそれはこの両者と右派との間に存在していた。中間派と左派との相違は、民族的伝統に依拠する民主主義を社会主義と対立させるかいなかという点にあった。前者は、合理主義的方法と知性を尊重する一方で、ハンガリーの特殊性と民族的伝統を強調するあまり、ハンガリーの歴史的使命をハンガリー人種の真の性格の確立と考え、神話の創造や人民の共同体的生存力の過信に陥る傾向があった。彼らのイデオロギーは、ネーメット・ラーズローに代表されるように、サボー・デジェーの「ロマンティックな反資本主義」や人種神話を産み出す人種的偏見に影響されていた。この派の政治綱領は、急進主義的な「第三の道の探求」思想に集約される。しかし、彼らのこの思想は、第二次世界大戦以前においては一定の進歩的役割を有した。それは、この思想が、反ソ的であったとはいえ、列強の侵略的民族主義を拒否し、ナチスの侵略に対する防衛を呼びかけて、反ファシズム思想の普及に貢献したことであった。そしてこの思想はまた、急進的な左派の形成にも道を開くものであった。と同時に、彼らのハンガリー急進主義は、右翼によって盗まれ、彼らのデマゴギーの道具として利用されるもした。特に右翼的な雑誌『マジャル・ウート』*Magyar út* (ハンガリーの道)や『マジャル・エーレト』*Magyar élet* (ハンガリー生活)などに、この思想がしばしば登場した²¹⁴⁾。

そして(3)右派は、エルデーイ、コドラーニイ、サボー・レーリントツ、シンカによって代表される²¹⁵⁾。彼らの思想は、右翼急進主義と呼べるもので、時にはファッション運動に接近し、またしばしば体制の代表者と接触をもっていた²¹⁶⁾。

こうしたイデオロギー的分化とは別に、運動の活動をめぐる論争も展開されていた。論争のもっとも大きなテーマは、運動が精神的運動に留まるか、それとも目的達成のために政治闘争にはいるかということであった。

急進的な農民政党の構想は、すでに長い間、一部の人民主義者をとらえていた。1936年1月に、フェーヤは『ヴァーラス』に「ハンガリー農民政党のために！」という論文を発表していた。それは、ハンガリーにおける新しい農民政党の結成を主張したのではなく、一般的に将来の中東欧の連邦を強力な農民政党が統治すべきことを示唆したものであった。これが、『ヴァーラス』の次号においてヴェレシュの反論を呼んだ。彼は、イデオロギー的に農民が分裂している現在のハンガリーの政治状況では、強力な農民政党の結成は適当ではないと主張した。この論文は、フェーヤへの反論としてはいささかの外れていたが、ヴェレシュの見解を明らかにするものであった。それによれば、彼は結論としては急進的な農民政党および中東欧の「農民民主主義」は望ましいものであるが、現在あるいは近い将

213) Söter István (szerk.), I. m., 299-300 l.

214) U. o., 300-310 l.

215) 文学史研究所発行の文学史はコドラーニイを中間派に入れ1940年代から右傾化したとし、またシンカを右派の代表に入れているが、歴史学研究所の通史では、右派の代表者をエルデーイ、コドラーニイ、サボー・レーリントツその他としている(U. o., 310 l., 841 l.)。

216) U. o., 814 l.

来でさえそのような計画を具体化することはほとんど不可能であろうと考えていた²¹⁷⁾。

これ以後、この議論は表舞台から消えたが、1937年10月のマコーの集会で再び取り上げられた。集会に先立ち、運動の指導的人物30~40人が集まった会議でこの議題が検討され、圧倒的多数で新しい政党の形成は否決された。イエーシュ、タマーシ、コドラーニイ、サボー・レーリント、フェーヤは、「政治的組織の重荷には耐えられない」と主張した。彼らは、支配層の良心と根本的变化を必要としている底辺層の双方に訴えることを望んでいた。またヴェレシュも、新しい政党の形成には反対した。その理由として、まず、新しい政党と既存の社民党や独立小地主党との競合を恐れたこと、また、三月戦線に参加している学生達が効率よく組織されるとは信じ難いこと、そして、彼自身、すでに社民党員であったことがあげられる²¹⁸⁾。

結局、新しい政党の結成に賛成したのは、エルデイとコヴァーチだけであった。エルデイは『ヴァーラス』の12月号に「自由の政治学」“A szabadság politikája”と題する論文を寄稿した。この中で、「政治的な道だけが自由を導くことができる」と訴えた。これに対して、フェーヤは、『ヴァーラス』の次号で「精神のイデオロギー」“A szellem ideológiája”と題する論文を発表し、従来の文化的潮流としての在り方の継続を主張した²¹⁹⁾。

しかし、結局、この議論の結論はこの段階では出なかったようである。恐らく、結論を出す以前に、いやむしろ結論を出すための道において、三月戦線が崩壊してしまったのであろう。

こうした議論が続くなかで、政府の作家に対する弾圧も強まっていた。フェーヤは『嵐のコーナー』第三版の出版によって再び2カ月間投獄された。また三月戦線の主催する集会には必ず警察が介入し、予定の集会が禁止されることもしばしばであった。1938年3月15日の三月戦線結成一周年を記念する集会は、こうした禁止命令を無視して場所を移して行なわれた。そこで演説したコヴァーチは、翌日逮捕されるに至った²²⁰⁾。さらに3月27日に、フェーヤ、エルデイ、カーライ、ウーイヘイ、ヴェレシュが参加してデブレツェンで開かれる予定であった集会も警察によって禁止された²²¹⁾。この結果、3月15日の集会が、三月戦線の最後の大きな活動となってしまった²²²⁾。

しかし、文化的活動としては、3月に『ヴァーラス』と『ヒード』に「ハンガリー人は何を望むか」と題する包括的な民主的プログラムが発表された。この綱領は、やはり12項目の要求からなっていたが、1年前に発表されたものよりも急進的な内容を持ち、より広範な問題をより詳細に取り上げていた。綱領の要求は次の通りである。

- (1) 国家の民主的変革：普通・平等・秘密・非制限選挙権，権力を行使する官僚の制限，および個人的・政治的自由の回復
- (2) 人民的自治を基盤とする行政：都市の中心周辺における特別県制度を，農村やタ

217) C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 136-138.

218) *Ibid.*, pp. 138-139.

219) *Ibid.*, pp. 140-142.

220) *Ibid.*, p. 143.

221) “Debreceni főkapitány-helyettes betiltó határozata a Márciusi Front ünnepségeiről”, Am. kir rendőrség debreceni kapitánysága, Szam. 66/95-1938 (*Dokumentumok*, 148-149 l.にある)。

222) C. G. Gati, *op. cit.*, p. 143.

ニャにも拡大する人民主義的地方行政機関や、地方の生活力のある行政的・文化的中心地の建設を助けるような国土の再編成

- (3) 封建制の完全な払拭：不分割地の開放，500ホルド以上の大土地所有の収用，形成されつつあるまたは既存の農民経営の協同組合化あるいは関係した農民の決定によっては集産的生産農場の設置，さらに，農業生産の近代的発展，その一方で農業労働者と農場労働者の生活水準の向上
- (4) 大資本の権力の粉碎：カルテルや独占の禁止，労働者の要求に従った大工業生産の再編成，小工業の協同組合的組織化，国の自然条件に応じた工業化
- (5) 共同体の利益となるような信用・販売・分配の組織化：資本家と兼職者の莫大な収入に奉仕する銀行および独占の禁止，生産者・商人および消費者が平等な権利をもつ同盟に基づいた取引網の建設，消費力の増大と不公平な課税制度の社会的改革
- (6) 全人民の労働権：工業・農業・精神的労働者のための最高労働時間，最低賃金，全般的な社会保険の法律的規制，そして全勤労働者の組織化の自由
- (7) 経済生活の全般的な協同組合的編成：似非協同組合の廃止，生産者と消費者の真の協同と地方や生産部門ごとの自治を基礎とする組織の正しい形成
- (8) 階級的精神をもつ社会的指導の廃止：ハンガリー人民全体にわたる，出身・職業を問わない人間的理想の創造，最良のハンガリー人民のための人民的精神による社会の指導の保証
- (9) ハンガリー社会の全領域におけるハンガリー人 *magyarság* の指導的役割：ハンガリー人意識をもたない少数民族の諸権利の完全な保証と同時に，彼らの真の同化の完全な尊重
- (10) 人民的基础に立つハンガリー人全体の民族教育：14歳までのすべての子供に及ぶ無料一律義務教育，その後のすべての職業のための高度な職業訓練，特に農業専門教育の発展，科学的研究と最高の科学的教育のための大学の開放，ハンガリーの教育組織の自治と国家的・社会的生活のあらゆる領域における質的選抜
- (11) 人民的基础をもつ普遍的・ヨーロッパ文化の発展：時代遅れの紳士の態度と根拠のない異質な文化的影響からのハンガリーの精神生活の解放，農民と労働者の完全な知的参加による新しいハンガリー文化共同体
- (12) ハンガリーの国境修正：ドナウ河流域諸人民の自決権の実施，すべての列強のドナウ河流域からの排除，外国権力の代理人のハンガリーの政治生活からの排除，ハンガリー人の民族的防衛の完全な準備，ハンガリーの独立した対外政策によって安全な基礎を生み出す内政²²³⁾

このプログラムは，1年前のものに比べて全体としてより詳細な内容をもっている。この綱領に特徴的なことは，農業の諸問題を中心としたより細部に渡るまたより急進化した民主化の要求，全経済部門の協同組合化，そしてハンガリー民族主義の主張であった。さら

223) “Mit kíván a magyar nép?” — A Márciusi Front átfogó demokratikus programja”, *Híd*, 1938, máj. (*Dokumentumok*, 145-146 l. にある)。

に論議的であった12項目めの要求において、1年前の要求では、ドナウ河流域人民の自決権と合わせてドナウ連邦の実現が唱われていたが、この綱領では後者は欠落してしまい、各民族の自決権が強調されている。恐らく、これらの要求は、1年間の作家達の活動によって生み出されたものであろう。もっとも、これを発表するに際して、作家の間で意見の相違があった。この綱領を起草したのは、イエージュ、シャルケジ、コヴァーチ、エルデイ、フェーヤであったが、これに対して、ヴェレシュは、もっと日常的な問題を扱うことを主張して、このプログラムの発表に反対した²²⁴⁾。

以上のように、三月戦線は、3月15日の宣言をもとに、各地で知識人や学生、民主化を望む野党のメンバーを取り込みながら、人民を変革に目覚めさせるための活動を展開し、農民の間でも反響を呼びつつあった。それと並行して、運動内では、戦線の活動の在り方をめぐって論議が高まり、すでに分裂の徴候が現われつつあった。そして、1938年の3月に発表されたより詳細な綱領は、急進的な民主化の要求とともに、民族主義的色彩を帯びていたが、それは他の弱小民族を排除しようとするものではなく、列強の侵略の脅威に向けられたものであった。そして、このような三月戦線の活動が、政治活動を徹底的に弾圧されていたハンガリー共産党の注目するところとなった。次節では、人民戦線政策を国内で遂行しようとする共産党が、その基礎として三月戦線を考えるようになった経過、ならびに共産党の人民戦線政策の試行過程を述べて、三月戦線の意義を考える。

第3節 人民戦線政策のハンガリーへの適用と三月戦線

1930年代は、国際的なファシズムの前進とともに、それに対する闘いが世界的規模で繰り広げられた時代であった。ハンガリーにおいても、ファシズムの前進を目の前に、左翼を初めとして民主主義の確立のための活動をしていた人民運動などが、それに対する抵抗を試みていた。

1935年7月25日から8月20日にかけて開かれたコミンテン第7回大会は、世界的なファシズムの攻勢に対して、労働者の反ファシズム統一戦線ならびに、勤労農民・都市の小ブルジョアジー・プロレタリアート闘争同盟の結成を目指す反ファシズム人民戦線を戦術として打ち出した²²⁵⁾。この決定に基づいて、ハンガリー共産党中央委員会は、1936年1月15日に黨員ならびに党の諸組織に向けて手紙を発送した。それは、ファシズムとの闘いと自由の擁護のための闘いにおけるブルジョア諸政党との行動統一戦術を検討・修正する内容で、人民戦線が勤労人民、特に勤労農民の要求と勤労者の諸層の統一に依拠すると述べていた²²⁶⁾。しかし同時に、手紙は、

224) C. G. Gati, *op. cit.*, p. 144.

225) デイミトロフ著、坂井信義、村田陽一訳『反ファシズム統一戦線』国民文庫、大月書店、1955.

226) 「人民戦線の形成は、第一にプロレタリアートが全力を尽くして、勤労人民の諸層の——特に勤労農民の——要求のために、活動を進めることに依拠している。その要求とは、——たとえば、民主的選挙権や自由権、農民に金銭的負担をかけない土地改革、カルテルや大資本の不当利益の禁止、税負担の軽減、戦争冒険に反対する活動など——プロレタリアートの基本的利益にかなうものである。……人民戦線の形成は、第二に我々共産党が全勤労人民の共通の利益を表現する民主的闘争のプログラムを基礎にして、すべての反ファシズム勢力の連合のために勤労者の様々な層を統一することにかかっている」(Pölskei F. és Szakács K., I. m., 926 l.)。

「ファシズムの圧力の下に1人立つ合法的な組織に、共産党のスローガンに近い開かれた態度を求めはしない。それどころか、共同闘争に向けて共産党とソ連に対する中傷の停止を要求する²²⁷⁾。」

と述べて従来の党の政策に固執した。しかし、批判を受けた中央委員会は政策の修正を始めた。ところがクンと中央委員会全体に対して不信感を抱いていたコミンテルンは、指導部が第7回大会の決定の採用を遅らせていると主張して、1936年5月に共産党の中央委員会を解体し、サントー Szantó Zoltán に第7回大会の方針の実施と中央委員会を選出する党大会の準備を任せ²²⁸⁾。そこで、新しい暫定的な指導部は²²⁹⁾、1936年6月23日に第7回大会の方針を実行に移すために以下のような重要な任務を決定した。

a) 民主的権利の擁護と拡大のための闘争

反動家やファシズムに対して、ハンガリーの民主共和制のための闘いに動員できる「すべての政党」、組織、グループおよび個々の要素をこれに引き入れながら、人民戦線運動を発展させねばならない。

b) 平和維持のための闘争

報復戦争の危険が増し、支配層はトリアノン条約の修正のスローガンを戦争準備のために利用している。この決定は、政府の政策がハンガリー民族の独立を危機に陥しめると主張するものである。ただ、「ヨーロッパの平和を愛する勢力との協力だけが、ファシズム政権の打倒においてハンガリー人民のトリアノン条約の修正を達成することができる。

c) 労働者の日常的な擁護、より良い労働条件、失業保険、OTI 労働者の自治のための闘争

d) 大土地所有者の土地を無償で貧農が獲得する土地改革のための闘争²³⁰⁾

このプログラムの特徴は、国の民主的変革・民主共和制の達成ということと並んで、土地分配が上げられていることである。すでに見たように、農民問題が戦間期においてもっとも大きな問題であったハンガリーでは勤労農民の獲得なしには人民戦線の形成は不可能であった。そこで労農同盟の概念を、従来のプロレタリアート独裁の一部としての労農同盟という考え方から、ここではプロレタリアートと農民の同等な立場に基づく労農同盟という概念に理解を改めた。それは、土地改革の内容を、従来の土地の国有化という方針から土地分配に転換したことに表われている。

こうして、1936年夏から、共産党は反ファシズム人民戦線政策を開始した。その中心的な言論機関は、ハンガリーで合法的に発行されていた政治・科学・文学雑誌の『ゴンドラト²³¹⁾』(1935年1月-1937年11月)とプラハで発行された新聞『ドルゴゾーク・ラブヤ』Dolgozók lapja (勤労者新聞、1937年4月-1938年1月)、そしてモスクワで発行された

227) Ságvari Ágnes, I. m., 439 l.

228) Kállai Gyula, I. m., 438 l.

229) 中央委員会の役割を果たす暫定的な指導部は1938年の終わりまでプラハで機能し、国内の党諸グループと関連を保っていた(Nemes Dezső (szerk.), I. m., 439 l.)。

230) U. o., 437-439 l.

231) 同誌は、人民戦線政策の普及と三月戦線の形成に重要な役割を果たした(Révai, I. m., 502 l.)。

『ウーイ・ハング²³²⁾』 *Új hang* (新声, 1938年1月-1941年) が担った。そのなかで、『ドルゴゾーク・ラブヤ』の第1号は、次のように人民戦線の形成を唱道した。すなわち、

「今日、ソヴィエト共和国ではなく、民主的ハンガリーのための闘争を共産党は掲げており、この目的のためにハンガリー人民の利益を思い、ファッショ独裁と戦争に反対する人なら誰でも共に闘う用意がある。」

と²³³⁾。

そこで共産党は、国内における人民戦線政策の実施のために、まず社民党との行動統一に歩みより、様々な民主的運動との連携を計ろうとした。しかし、統一戦線あるいは人民戦線の基盤を形成すべきそれらの組織は、共産党に対して深い不信感を抱いていた。

まず、統一戦線の基盤となるべき社民党との同盟は困難であった。社民党の指導的理論家モースシュ *Mónus Illés* は、1936年7月に雑誌『ソツィアリズムシュ』で、スペインとフランスにおける人民戦線の成功に言及し、それを歓迎した²³⁴⁾。しかし、7月26日の『ネープサヴァ』に発表した論文は、ハンガリーのブルジョア民主主義の混乱に言及し、ハンガリーにおける人民戦線の可能性を否定した²³⁵⁾。すなわち、社民党指導部は、ホルティ体制下において反ファッショ大衆政党や一般民主主義が欠如しているなかでは、人民戦線にとっての主体的条件が存在しないと主張したのである²³⁶⁾。このため、共産党と社民党は人民戦線政策という点で相互に接近することはできなかった。

しかし、社民党の諸組織の強化をもその重要な任務とした共産党の新しい政策によって、社民党系の青年組織、全国青年委員会 *Országos Ifjúság Bizottság* の指導権が共産党の手に移行しつつあった。この団体は、主として労働組合のクラブハウスで青年集会を催し、人民戦線政策に関するビラの作成やソ連との友好の宣伝をした。また、労働者組織の擁護と民主的権利のために普通・秘密選挙権獲得運動に参加したり、矢十字に対する攻撃を組織したりしていた²³⁷⁾。

では、ハンガリーに人民戦線形成のための主体的条件が存在しないとした社民党指導部は、三月戦線をどのように評価したのであろうか。三月戦線以前、特に新精神戦線の時代

232) 『ウーイ・ハング』は、モスクワの亡命ハンガリー人によって編集されていた政治・文学雑誌。同誌において初めて、人民作家のマルクス主義的分析がなされた。反ファッショ人民戦線の精神で発行されていた同誌は、解放の精神的準備とハンガリーの人民戦線運動の理論的諸問題の解決において重要な役割を果たした (U. o., 506 l.)。

233) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 921 l.

234) “Mónus Illés a spanyol és a francia népfront világraszóló sikereiről ír, és igazolmi próbálja a szocialdemokrata nézetek helyességét”, *Szocializmus*, 1936, júl. (*Dokumentumok*, 70-75 l. がある)。

モースシュは労働者とブルジョアジーとの同盟という解釈を強調して人民戦線思想を受け入れたが、同時に「人民戦線を戦術操作として扱う共産主義運動を批判し、ソ連においても人民戦線思想が実施されることを要求した。」その後、彼は次第に農民の役割の重要性を認識するようになったが、それでも社会民主主義のヘゲモニーを基礎とする人民戦線を想定していた。しかし、それと同時に、人民戦線思想の共産主義的解釈を受け入れる社会民主党左派の形成に貢献した (Ránki György (szerk.), *Magyarország történet*, 848 l.)。

235) “Mónus Illés a magyar polgári demokracia fejletlenségére hivatkozva utasítja el a népfront lehetőségét Magyarországon”, *Népszava*, 1936, júl. 26. (*Dokumentumok*, 75-78 l. がある)。

236) Ságvari Ágnes, I. m., 50 l.

237) Nemes Dezső (szerk.), I. m., 441 l.

には、社民主義者は人民運動を徹底的に批判した²³⁸⁾。しかし、三月戦線の綱領の発表は、「組織された労働者は、当然、最大の共感をもってそれに注目する。なぜならば、そのプログラムにおいて、社会民主主義的国家を建設し、誠実な人民精神を形成する活動と対立する表現はみられないから²³⁹⁾」という1937年11月の言明にみられるように、社民党指導部に三月戦線の民主化要求に対する期待を抱かせた。たとえば、モーヌシュは、1937年に『ソツィアリズムシュ』に発表した「ソツィオグラフィア」“Szociografia”という論文で、人民作家の階級や諸グループに対するアピールは、伝統的に右翼に連結しており注意が必要であるが、イエーシュやフェーヤ、エルデイ、ダルヴァシュ、コヴァーチなどの作品は政治活動のための資料分析として有効であり、またそのプログラムも社民党にとって受け入れられるものであると好意的に評価した²⁴⁰⁾。しかし、社民党の個々のメンバーは、三月戦線にかかわっていったとはいえ、党指導部が三月戦線との積極的な共同行動をとる決定を行なうことはなかったし、また、三月戦線をハンガリーにおける人民戦線形成の一基盤と考えることもなかった。

そこで、共産党は、次に「工業労働者は民族独立を危険に陥し入れ大土地所有制を守る……（体制）に反対する広範な農業労働者と共同することができるのみならず、平和や民族独立、封建的残滓を強く維持している大土地所有制の廃止、民主的ハンガリー等のためにも彼らと共同することができる²⁴¹⁾」という認識から、人民戦線の基盤となる農民政党的な運動を求めた。しかしまた、戦間期最大の農民政党的な協力は困難であった。1930年に結成された独立小地主党は、初代の指導者ガアールが死去した後、1932年12月に、かつての白色テロルの参加者エックハルトが指導者に選出された。彼の下で同党は、1934年-1935年にかけて、ゲムベシュの改革デマゴギーに魅せられて政府に接近し、1935年2月26日にエックハルト-ゲムベシュ協定を結んだ。ところが、まもなく選挙で勝利したゲムベシュは、この協定を一方向的に破棄したために、エックハルトは今度はゲムベシュの敵対者ベトレンとの妥協に進んだ。したがってこのような、支配階級と同盟し、反共的な民族統一思想に執着して労働者階級との対立を深めていた小地主党指導部と共産党との接近は困難であった²⁴²⁾。

そこで、共産党がもっとも注目したのが人民運動であった。その理由は、まず第一に三月戦線の綱領が農村の民主的勢力の糾合と統一を促進する内容をもってしたこと²⁴³⁾。第二に、彼らの社会的要求とその活動が農村大衆および知識人に大きな影響力をもっていたことから彼らを通じて農村大衆との関係を作り出すことを期待したこと²⁴⁴⁾、第三に、運動

238) たとえば、新精神戦線の時代には、ヨージェフヤイグノトウシュ、ジョルト等の批判的論文が『ソツィアリズムシュ』に掲載された。ヨージェフは、「人民作家は、『改革時代』を信頼しているが、改革が何によって構成されているのか知らないし、とりわけ改革の前提条件が何であるのか考えていない。彼らのイデオロギーは、一子制を受け入れざるをえない貧しいハンガリー人民の存在とハンガリー政府の存在である。……」と批判した。またイグノトウシュも、1935年末に人民作家はフアッシュの傾向を帯びてきたと批判した(C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 155-158)。

239) Pölöskei F. és Szakács K., I. m., 928 l.

240) C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 160-161.

241) Pölöskei F. és Szakács K., I. m., 299 l.

242) Ságvari Ágnes, I. m., 59 l.

243) Pölöskei F. és Szakács K., I. m., 929 l.

244) Ránki Ggörgy (szerk.) *Magyarország története*, 930 l.

は極右的傾向から左派的傾向まで様々な潮流を内包していたが、左派的・進歩的傾向との協力の余地を見出したこと、そして、このような運動内の様々な傾向の存在は、党の活動に隠れみのを提供すると考えられたことであった²⁴⁵⁾。

こうして、共産党は、『ゴンドラト』とデブレツェンの左翼知識人の発行する『トヴァーブ』を通じて、人民戦線形成のために人民運動や三月戦線に働きかけた。『ゴンドラト』は、第1号から人民作家に言及したが、共産党が人民戦線政策を採用する以前は、彼らに厳しい批判を加えていた。たとえば、1935年の1月号では、ネーメット・ラースローの「質の社会主義」がナチスとイタリアの国家社会主義と対比して論じられた。さらに1936年の初めには、彼は「解体しつつあるブルジョア社会のイデオログ」と呼ばれ、「ハンガリーの勤労人民は彼の退廃的見解を共有しないであろう」と批判された。しかし、1936年の共産党中央委員会の刷新によって、『ゴンドラト』は人民作家の作品を掲載し、彼らに対する批判の調子を友好的なものに変えた。そして、三月戦線の出現に際しては、これを熱狂的に歓迎し、社民党の三月戦線に対する無理解を非難した²⁴⁶⁾。

さらに、共産党は、運動に参加したデブレツェンの若い共産主義者が発行する『トヴァーブ』を通じて、人民戦線思想を普及させようとした。そして、彼らデブレツェン・グループに支援されて運動内の左派的・進歩的傾向が発展し、三月戦線が反ファッショ民主勢力の中心となることを期待した。

『ドヴァーブ』は全部で3号しか発行されなかったが、投稿者は非共産主義的人民作家から既成の野党政治家にまで渡り²⁴⁷⁾、反ファッショ民族統一戦線を提唱した。彼らのビラの初めには、後に一般に受け入れられた大衆的スローガン、「土地・パン・自由！」と、将来の人民的民主主義 *népi demokrácia* の要求が掲げられていた²⁴⁸⁾。1938年4月-5月号の『トヴァーブ』は「人民戦線」と題する論文を掲載している。この論文は、オーストリアの併合によってもたらされたハンガリーの独立の危機とファシズムの危険を指摘し、ハンガリーにおける人民戦線の必要性を力説して、人民戦線として普通・平等・秘密選挙権のための闘争を宣言した。そして「労働者階級、主に300万人のハンガリーの乞食達への援助以上に今日普遍的なハンガリーの利益はないことを主張」した²⁴⁹⁾。

人民戦線に関連した人民運動に関する共産党の解釈・評価は、1937年から『ゴンドラト』や『ウーイ・ハング』その他に発表されたレーヴァイとルカーチ *Lukács György* の言明によって知ることができる。特に、1943年に出版されたレーヴァイの『マルクス主義と人民主義²⁵⁰⁾』 *Marxizmus és népiesség* は、人民運動に関する最初のマルクス主義的論

245) C. G. Gati, *op. cit.*, p. 174.

246) *Ibid.*, pp. 175-180.

247) *Ibid.*, p. 182.

248) Kállai Gyula, *I. m.*, 65 l.

249) *U. o.*, 267-271 l.

250) この本は、1938年にブラハで執筆され、1939年4月から8月まで『ウーイ・ハング』に連載された。ハンガリーで出版されたのは1943年になってからであるが、その草稿はすでに出版される以前にハンガリー国内に持ち込まれていたといわれる (C. G. Gati, *op. cit.*, p. 211)。したがって、三月戦線の時代に、この本が人民作家に読まれたわけではない。しかし、レーヴァイの1937年からの人民運動に関する批評活動は、運動に参加した若い共産主義者等を通じて人民作家等に伝わっていたとも考えられるが、それを論証する資料は今のところ手元にはない。

評で、ファシズムに対する闘いの一部として民族独立の擁護と関連させながら人民運動を凝視したものであった²⁵¹⁾。彼は、まず、従来の共産党の政策を「大地主に対する闘いにおいて農民の統一の可能性を過小評価、除外していた」と自己批判した²⁵²⁾。そして、人民主義者の仕事を、「ハンガリーの諸問題の解決のためのプログラムを与えようとしており、独自のイデオロギー、社会・歴史・進歩に関する独自の見解を有し、大きな要求をもつ精神的潮流」と考えた。しかし、彼はここで、運動全体ではなく、イデオロギー的・社会的観点から三月戦線の綱領と人民作家の農村調査的な作品を評価したのであった²⁵³⁾。

彼はこの本の中で、三月戦線の綱領が当時の「もっとも民主的な農業プログラム」であることを認め、その民主主義、土地改革、農民の統一を促す諸要求を評価し、彼らの農業改革の主張を小ブル的望みと考えることではできないと述べた。また、30年代のハンガリーでは、農業革命を実行する権力は、民主的労働者・農民からかけ離れた存在ではありえないとした²⁵⁴⁾。その一方、彼は、人民運動の中に、「労働運動に対して示された不信や民族主義、帝国主義と社会主義との闘いにおける『特殊ハンガリーの道』という幻想」の存在を指摘し、ファシズムの浸透に対する無防備を批判した²⁵⁵⁾。そして、三月戦線が運動を精神的運動に留めているとし、社会改革を実現するためには、支配層の説得ではなく、改革目標を「日常政治に引きずり込まなければならない」と述べた²⁵⁶⁾。このように、運動内のファシヨ的危険性を指摘しつつも、同時に民主的・反ファシヨ的要素を支援した。そして最後に人民運動を、「この時代に、これほど深く世論に浸透し、その影響がこれほど大きく豊かにハンガリーの全公共生活および精神生活のほとんどすべての領域にわたって行使された潮流はなかった²⁵⁷⁾。」と結んだ。

彼は、この本の中で、人民運動の評価に関連した理論として、新しい人民民主主義的革命的変革 *népi demokratikus forradalmi átalakulás* を構想して、次のように述べた。

「ファシズムのドイツでの勝利は、我々にとって、ハンガリーの変革の民主的・社会主義的要素の比率が急速に変わり、これとともにハンガリー革命の全形態も変わるほどの民主主義のための闘争の任務を前面に追し出した。……ハンガリーの変革は、社会主義的性格をもつものにはならないであろうし、また、普通の意味におけるブルジョア民主主義的性格をもつものにもならないであろう。農業問題をブルジョア化しつつあるまたそれを望む農民層と貧農の利益の可能な均衡を基礎にして解決する限りでのブルジョア民主主義、さらに政治的民主主義のブルジョア民主主義的形態と成果をもたらす限りにおいてのブルジョア民主主義……最後に、全民族のためにドイツの帝国主義的植民者に対して国の独立した生活と自由な民族発展を保証する限りにおいてのブルジョア民主主義。しかし変革は、過渡期において——政治的・経済的な分野で——ブルジョア民主主義の枠を越えてゆくであろう。変革の特徴は、人民の敵に対する戦いの中で、全人民

251) Sóter István (szerk.), I. m., 270 l.

252) Pölöskei F. és Szakács K., I. m., 926 l.

253) Sóter István (szerk.), I. m., 290 l.

254) U. o., 290-291 l.

255) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 930 l.

256) Révai József, I. m., 11 l.

257) U. o., 45 l.

のために独占資本の所有権に介入することを妨げない限りにおいての、また社会主義的労働者が、もっとも信頼のおけるもっとも組織されたもっとも用心深いもっとも行動力のある支柱言い換えれば指導力である限りにおいての、ブルジョア民主主義以上のものである²⁵⁸⁾。」

このように、彼は、三月戦線に対する批判を通して、来るべき人民民主主義革命の理論を構築していた。彼は、革命から生まれる権力を、プロレタリア独裁でもなく、またブルジョア民主主義でもなく、それを越えたものであると考えた。こうして、彼は、三月戦線の経過を踏まえて、人民運動に人民戦線の一基盤となる可能性を見出し、人民運動を民主的方向に誘導・発展させ、ファシズムに対する闘いに共産党とともに立ち上がらせることを希望していた。

他方、ルカーチは『ウーイ・ハング』において1939年5月から人民作家に対する論評を始めた。彼はまず、イエーシュの『ハンガリー人』*Magyarok*の批評において彼の反ユダヤ主義を非難した。1940年の7月-8月号では、ネーメット・ラースローの人種の歴史観を批判するとともにコヴァーチの右傾化を非難した。彼は、当時、運動に支配的であった「ロマンティックな反資本主義」を批判するとともに、ネーメット・ラースローやフェーヤ流の、純粋に精神的な運動が政治生活に影響を及ぼし変革を招来するという「素朴で楽観的な」思考に断固反対し、より政治的な志向の強いエルデイやコヴァーチ、ダルヴェシュなどの左派を応援し、後者の志向が運動に普及すれば歓迎すると結んだ。『ウーイ・ハング』は、人民運動に進歩的な要素と反動的な要素の混在を指摘し、前者を発展させて人民戦線の形成に至ることを期待していた²⁵⁹⁾。

しかし、以上のような共産党の人民戦線政策は、ハンガリーにおいては結実しなかった。人民戦線の基盤を三月戦線と人民運動に期待した共産党であったが、国内における組織の弱体や政府の弾圧は、国内外で急速に勢力を拡大しつつあったファシズムの前に共産党を無力化した。共産党が人民戦線の基盤としての可能性を見出した人民運動でさえ、ファシズムの影響から免れえなかったのである。こうして、三月戦線は人民戦線の基盤となることはできなかった。しかし、共産党は、レーヴァイの著作に見られるように、国内における人民作家の活動や三月戦線の活動におそらく触発された形で、人民民主主義的変革の内容をすでにこの頃から構想し始めていたのである。したがって、この30年代における人民運動、三月戦線と共産党の出会い、この時期には何の成果も生み出さなかったが、第二次世界大戦下における反ファシズム・民主勢力の結集、そして人民民主主義革命へと通じる道の出発点であったといってもよからう。

第4節 三月戦線の解体

1938年3月の『ヴァーラス』と『ヒード』における三月戦線のより急進的なプログラムの発表は、警察の介入を呼び、その起草者は告訴された。そして、その数カ月後、1938年の6月に『ヴァーラス』は廃刊を宣言し、これによって三月戦線の時代は終わった。まもな

258) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 851-852 l.

259) C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 229-230.

く『トヴァーブ』が9月号を最後に発禁となり、『ヒード』も廃刊となった²⁶⁰⁾。

『ヴァーラス』の廃刊、ひいては三月戦線の解体の原因は、当時のハンガリーをめぐる国際的・国内的な政治情勢の悪化と人民運動内部の対立の表面化にあった。『ヴァーラス』の廃刊は、シャルルケジによれば、同誌が直面した財政的逼迫と、「精神的自由の減少」に起因していた²⁶¹⁾。そして、後者の理由は、三月戦線の解体の原因のひとつと符合していた。

三月戦線の解体の原因のひとつは、ファシズムの国際的前進、特に1938年3月のドイツによるオーストリア併合 *Anschluss* によってドイツとハンガリーが国境を接するようになったという国際的要因であった²⁶²⁾。

第二の要因としては、国内の右傾化の進展を上げることができる。ゲムベシュの後を受けたダラーニ政権は、1937年11月のハンガリー・ドイツ首脳会談以後、西欧列強の宥和政策に敏感に反応し、従来の二重政策（対外政策において西欧およびドイツ間のバランスをとること）を修正し、ドイツへの接近を開始した。また国内においても、極右勢力の伸長を許し、1938年3月5日のジェールにおけるジェール・プログラムと呼ばれる再軍備計画の発表や反ユダヤ法の議会への提出などを通じて右傾化の道を歩んでいた²⁶³⁾。その後、1938年5月14日にダラーニの後を受けて首相となったイムレーディ *Imrédy Béla* (1938年5月14日-1939年2月15日) は、当初前任者がとっていたドイツへの接近・極右勢力温存という政策を変更し「均衡」政策および極右勢力の迫害に戻っていたが、1938年の秋から彼もまたダラーニと同様な右傾化の道を歩み始めた²⁶⁴⁾。

そして、このような内外の情勢を反映して様々な国家社会主義勢力が、急速に抬頭してきた。特に1938年以降「1938年は我々の年だ！」としてこれらファッショ勢力は、大衆的基盤を拡大するとともに、「ハンガリー主義運動」に結集し、全盛期を迎えていた²⁶⁵⁾。

以上のような情勢が、当局の弾圧の強化と並んで、三月戦線を解体に導いた外的要因をなしていた。しかし、戦線の解体のもっとも大きな直接的原因は、人民運動内部の対立の深化であった。運動は、すでに述べたように、早くからイデオロギー的に分化していた。そして、対立は、三月戦線が政治運動となるか文化的運動形態を維持するかという論争や、運動と工業労働者との関係、ドイツの危険性の解釈、「農民協同組合」の性格、中産階級の青年からの支援等に関する見解の相違²⁶⁶⁾という形でしばしば表われていた。にもかかわらず、基本的な部分、すなわち、農民の救済や土地改革という変革要求における共通の願望が、三月戦線を維持させていたのであった。けれども、1938年以降の内外の諸変化は、人民作家間の対立を一層深化させ、目的達成のために別個の道を歩ませることとなった。

分裂はすでに1937年の段階から徴候を表わしてきていた。たとえば『ヴァーラス』を創

260) *Ibid.*, p. 144.

261) *Ibid.*, pp. 44-145.

262) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 844 l.

263) M. Lackó, *Arrow-Cross Men*, pp. 148-149.

264) *Ibid.*, p. 28-32.

265) *Ibid.*, p. 20.

266) C. G. Gati, *op. cit.*, pp. 148-149.

刊した一人、ネーメット・ラースローは、他の編集者との関係を保ちつつも、三月戦線の集会等の活動には積極的に参加しようとはしなかった。1937年11月に音楽アカデミーで開かれた集会に彼とコドラーニイは、出席を予定されていたにもかかわらず現われなかった。また、ジラヒヤグヤーシュ、ネーメット・イムレは三月戦線の指導者と交友を保ってはいたが、それには参加していなかった。その一方で、若い急進主義者のエルデイやダルヴァシュ、コヴァーチ、シャルケジ、ヴェレシュなどが抬頭し、それをデブレツェンの若い共産主義者が支援していた²⁶⁷⁾。

このような運動内の不統一は、1937年11月の『ゴンドラト』の発禁処分と編集者の逮捕を契機として高まった政治運動となるべきか否かという議論のなかで促進された。デブレツェンやセゲド、マコーの三月戦線の重要な地方グループは、人民運動および戦線の政治への参加を支持した。こうして、1938年春には、左派と中間派の対立が深まった²⁶⁸⁾。ちなみに、1938年3月に発表された三月戦線一周年を記念するより急進的プログラムは、この急進化した左派の見解を表明していた。このような三月戦線における左派の強化、中間派の後退という分裂が、財政的理由と体制による集会の禁止や告訴などの迫害、右翼ファッション勢力の影響力の増大、大衆運動としての弱体とあいまって、1938年春の『ヴァーラス』の廃刊、三月戦線の解体へと導いたのである²⁶⁹⁾。

三月戦線の解体以後、分裂は一層進んだ。人民運動右派、特にコドラーニイ、サボー・レーリンツ、ネーメット・ラースロー²⁷⁰⁾、フェーヤ等が運動の主導権を握った。彼らは、親独的ではなかったが、サボー・デジュエー崇拜を深め、人種神話や公然たる反ユダヤ主義に陥っていった。この派は、雑誌『マジャル・ウート』や『マジャル・エーレト』を通じて彼らの思想を宣伝した²⁷¹⁾。

次に極右派エルデイとマトルチ、シンカはついに矢十字運動その他のファッション運動に接近するに至った²⁷²⁾。

そして、人民運動左派に属す幾人かの作家、ダルヴァシュ、エルデイ、コヴァーチ、オルトゥタイ、ヴェレシュ等は政治への道を歩み始めた。この派のうち、ダルヴァシュ、エルデイ、サボー・パール、ヴェレシュ等は、1939年6月29日にマコー近郊で貧農の利益の擁護を一貫して掲げた民族農民党 *Nemzeti Parasztpárt* を結成した²⁷³⁾。彼らのうち、ダルヴァシュ、エルデイ、オルトゥタイ、コヴァーチは、共産主義者との関係を強化し、バイチ=ジリンスキーと協力しつつ民族農民党の機関紙となった『サバド・ソー²⁷⁴⁾』 *Szabad Szó* (自由な言葉) を反ファッション抵抗運動のフォーラムとして、抵抗運動に参加し

267) *Ibid.*, pp. 146-147.

268) Nemes Dezső (szerk.), I. m., 442 l.

269) Söter István (szerk.), I. m., 198 l.

270) この時期に彼はサボー・デジュエーの思想に依拠し反ユダヤ主義に染まった「少数民族について」“Kisebbségben”という論文を発表した (Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 846 l.)。

271) U. o., 845-846 l.

272) U. o., 845 l., C. G. Gati, *op. cit.*, p. 189.

273) Ránki György (szerk.), *Magyarország története*, 931 l.

274) 発行期間は1899年から1952年まで。1939年1月にサボー・パールが編集者となって以来人民作家左派や小地主党の貧農層の代表者がこの新聞のまわりに集まってきた。同紙は、民族農民党の結成とともに、その機関紙となった (Révai József, I. m., 505 l.)。

ていった²⁷⁵⁾。

以上のように、三月戦線は、その時点で目に見える成果を上げないままに解体し、人民運動は左右に分裂した。そのことは、30年代におけるハンガリーの人民戦線政策の破綻をも意味している。三月戦線は、人民戦線の基盤となることはできなかった。だが、それは、戦間期にあって、初めての党派を越えた民主主義獲得のための人々の集合の場となった。貧農の救済を求めて始まった人民運動は、約10年後、貧農の利益を擁護する目的からとはいえ、普通選挙権の獲得要求に見られるようにハンガリーに一般民主主義を要求する運動へと発展した。そして、それは人民作家の一部の反ファッショ闘争へ発展していった。しかしまたその一方で、拡大しつつある国内外のファシズムの影響は人民作家の一部をも巻き込み、民族主義と反ユダヤ主義思想が強化され、結果的に国内のファッショ運動のデマゴギーを支援する者も現われた。人民運動の基調をなしていたのは、強烈なハンガリー人・農民ナショナリズムであったが、それが進歩的な形で表現された場合、貧農の利益の擁護・民主化というスローガンとなり、反対に退行的な形で表われると、反ユダヤ主義・反資本主義・反社会主義となるのであった。そしてこの二面性の保持は、恐らく1930年代ハンガリーの時代状況の産物であった。その強調の度合が、三月戦線解体以後、民族農民党に集合して反ファッショ戦線に加わるか、それとも体制内で支配者の良心的変革を期待するかという二者択一の道を決定した。しかし、いずれにせよ、三月戦線の意義は、30年代における唯一の民主勢力結集の試みであり、それはまた、第二次世界大戦中の反ファッショ・民主勢力の先駆的試みであったことと言えよう。そしてそれは、戦後の人民民主主義的変革の展望を開くものであった。

結 び に か え て

以上のように、ハンガリーの伝統を受け継ぎ、戦間期の諸問題を体現していた人民運動は、初めは国内でもっとも多数を占める人々（貧農・農業労働者・小作人・小中農を合わせて全人口に占める割合は約48.1パーセントであった）の劣悪な生活状態や精神的貧困からの解放を目指して、急進的な土地改革や民主化の要求を掲げた農村出身の知識人による一種の文学運動であった。その後、貧農・農業労働者の窮状を社会に告発する活動を続けながら、改革を実現するためには政治とのかかわり合いが必要なことを認識するに至った。しかし、完全に政治的な運動に変貌したのではなく、運動は終始ある意味では政治を越えた「形而上学的」なままであり続けた。そして、この運動の活動が頂点に達したのが、民主勢力すべてを結集しようとした三月戦線であった。この運動史は、民族主義の波が国全体を席卷していた「穏健なファッショ体制」下における知識人の民主主義獲得運動の発展の歴史であると同時に、またその限界を表わしていた。

それは、戦間期のハンガリーにおいて、下層農民・農業労働者の窮乏を真摯な目で直視し、農業・農民問題に関する左翼の硬直的見解あるいは軽蔑に対してアンチ・テーゼを提出した。しかし、彼らの活動が、貧農・農業労働者の解放をめざすものであったとして

275) Ránki György (szerk.), I. m., 864 l., C. G. Gati, *op. cit.*, p. 189, Sóter István (szerk.), I. m., 298 l.

も、このアンチ・テーゼは、それ固有の限界をそなえていた。それは「第三の道」理念に代表される。この理念は、人民主義者の理想主義の産物であり、きわめて抽象的かつ曖昧で、具体的かつ確固たる思想体系ではなかったと同時に、反封建・反資本主義・反社会主義というスローガンに現われているように、歴史の発展を無視した退行的な側面もそなえていた。さらに、この運動は、政治的な方向へ発展していったとはいえ、文化的な啓蒙活動をより重視したために、変革のための具体的な手段を提示することができず、その効力には限界があった。そしてまた、運動の主たる担い手が、農村出身ではあったが知識人であったために、体制に対する闘いが民衆運動ほどの効力、革命的爆発力を持ちえなかったことも、運動のひとつの限界であった。

しかし、それでもなお、人民運動は、ハンガリーの民主主義の発展の歴史において一定の進歩的役割を果たしたといえる。それは、まず第一に、彼らの唱えた農民を民族の主体にするというスローガンが、反革命体制下において民族主義に席卷されていた農民や知識人を国の民主化を目指す運動に動員できたことである。

第二に、彼らの行なった農村調査とその公表、民主的変革のための啓蒙活動は、コミンテルンにおける人民戦線政策への転換まで自国の特殊性の認識とコミンテルンの指導の間で動揺していたハンガリー共産党に、国内における人民戦線の足がかりを見出させた。そしてまた、彼らの活動は、30年代から40年代にかけての反ファシズム闘争の歴史において、民主勢力の結集の準備をした。

そして最後に、人民運動に固有なナショナリズムのもつ当時における進歩性を指摘して本稿の結びにかきたい。人民運動のナショナリズムとは、19世紀以来いまだ達成されていなかった農民の民族への統合を目指すものであった。すなわち、1848年革命において、ブダペシュトの進歩的知識人グループは、従来の民族=貴族という民族の在り方に疑問を提出し、農民と労働者を民族へ統合することを目指したが、結局この試みは失敗し、そのために革命も挫折した。それ以後、再び民族=貴族という民族の在り方を否定する者はなくなり、左翼である社民党もこの問題を避け続けてきた。こうして、20世紀に至るまで、民族の下におとしめられてきた農民の民族への統合という問題は解決されないまま残されていた。そして、民族=貴族という図式に初めて疑問が投せられてから約80年後、20世紀初めに民族問題を取り上げたヤースィを経て、戦間期ハンガリーに、再び農民を民族へ上昇させることを目指す運動が登場したのである。それが人民運動であった。運動は、具体的には、農民達を封建遺制の桎梏と資本主義の搾取から解放するという形で表出し、戦間期の反革命体制と対立した。

そして、このナショナリズムは、人民民主主義革命の時期を経て社会主義が優位に立つにつれ、止揚されたかに見えたが、1956年のハンガリー動乱以後、人民主義の影響力が問題にされたという事実は、この時代においてもなお、それが民衆の中に根強い支持を持っていたことの証明であり、ハンガリーにおける人民主義の重要性を示唆している。そして現在、そのことがどのように解決されたのか、あるいはまだ解決されていないのかは、興味深い問題である。(1979年3月、脱稿)

A Study of Populism in Interwar Hungary

— Intelligentsia, Nation and Democracy in the 1930's —

Noriko SATO

Introduction

I. The appearance of the populists

- (1) The political background and conditions of the poor peasantry and the agricultural labourers
- (2) The intellectual background

II. The organization of the populist movement

- (1) The activities of the Village Explorers
- (2) The organization of the movement
- (3) The New Intellectual Front

III. The March Front

- (1) The formation of the March Front
- (2) The activities in the March Front
- (3) The application of the People's Front policy to Hungary and the March Front
- (4) The disintegration of the March Front

Instead of a Conclusion

It was the 15th of March in 1937. The garden of the National Museum of Budapest was filled with about 5,000 people, standing in drizzling rain. Then one man proclaimed the 12 Points just as the March Youth had proclaimed an earlier version of the 12 Points in the same place on the same day in 1848. It gave a signal to the formation of the March Front. And it was to be the place for organizing all people that demanded general democracy in Hungary where democracy was extremely restricted in the interwar period.

The present paper discusses the developing process and the meaning of the Hungarian populist movement up to the time of the March Front. The author should like to consider here how the suppressed can be emancipated in the late-comer countries, which have been forced to make their way with strong feudal survivals. That might serve to present a model of a movement for a democratic reform peculiar to the late-comers facing social changes. The paper consists of three chapters.

The first chapter examines the background of the appearance of the populists from the socio-economic, political and intellectual point of view. Interwar Hungary was ruled by three classes, that is, the aristocracy, the bourgeoisie and the gentry. These three classes were balanced under the Regent Horthy Miklos, the leader of the counter-revolutionary forces which had overthrown the Hungarian Soviet Republic in 1919. One of the most important problems under this regime was the survival of feudal elements in agriculture, such as the uneven distribution of the land. The

land reform enforced early in the 1920's did not fundamentally dissolve this surviving feudalism, on the contrary, it consolidated the polarized structure of huge estates and dwarf holdings in the 1930's. Under these circumstances, the poor in the rural area who composed about 36% of the population in 1930 and were called "3 million beggars", were more and more suppressed and reduced to poverty, especially after the World Economic Crisis. They resignedly endured their present situation — ignorance and heavy poverty, and at the same time neglect in public life. The government was very nervous about the activities in the rural area of the oppositions. The Hungarian Communist Party shook between the instructions by the Comintern and the Hungarian realities, but the Hungarian Socialist Workers' Party which had functioned as its legal party in the country from 1925 to 1928 could grasp the Hungarian conditions. The Communist Party followed basically the agricultural policy of the Hungarian Soviet Republic during the 1920's. Then it was the populists that rose up in order to emancipate the poor peasants and the agricultural labourers from their physical and mental poverty, in other words, the double yoke of capitalism and feudalism. The populists demanded radical land reform and the democratization of Hungary in order to make the peasantry a pillar of the "nation". This is because they considered the Hungarian way of development as different from the western European. At the same time they rejected the thinking of the former intelligentsia, which had been isolated from "real Hungarian", the peasantry. In this sense the populist movement had embodied itself one of the most serious contradictions in interwar Hungary.

The second chapter examines the process the populists went through to organize the movement and to approach the government. From the latter half of the 1920's, the students and the intellectuals interested in the rural communities began going to the countryside to gather the sociological and ethnological data. From the early 1930's the populist writers started publication on various problems among the poor in the rural area. At this stage the movement remained a sort of the literary movement. Their purpose was to realize an agricultural and democratic reform relying on the conscience and the good will of the ruling classes. This optimism toward the government led to the meeting in April, 1935 between the populists and the prime minister Gömbös Gyula. But this attempt came to nothing. The optimism of the populists was completely betrayed by Gömbös who announced the "reform" only as an act of demagoguery to establish his totalitarian dictatorship.

The third chapter deals with the populists' activities in the March Front in connection with the new policy of the People's Front of the Communist Party. The populists, heavily disappointed at the government, continued to reveal the difficulties and the miserable situations of the poor peasants and the agricultural labourers to the intellectuals and other urban inhabitants. Some of the populists came to recognize the necessity of political activity this time. However, the movement didn't completely transfigure into a political one, but remained "metaphysical". And this movement came to the highest point of its activities in the March Front in 1937, which was

formed for the purpose of rallying all democratic forces in the country. The Manifesto of the March Front demanded the democratic transformation of the country for the benefit of all the suppressed. It had overridden the former framework of the movement aiming at only a relief of the poor in the rural area. Consequently the March Front was to be the place for rallying all the people striving for democracy in Hungary regardless of their individual ideology. It should be noted that young communists participated in the March Front. The populists' activities had already drawn the attention of the Communist Party, which was trying to apply the new policy of the People's Front.

Before long, however, the March Front was forced to collapse because of the advance of the fascism in the international situations and the various fascist forces in Hungary, the strengthening of oppression by the government, and the deepening of the differences in thought among the populists who were united only on the point of the relief of the poor. The history of the March Front closed after a little more than one year. Afterward, the populist movement was roughly divided into the right and the left wings. The former deepened its nationalistic colour and served to promote the spread of the fascist tendencies in Hungary. The latter organized the National Peasant Party in 1939 and participated in the resistance against fascism in the Second World War. After the war some of them took part in the country's democratic transformation.

The history of the populist movement wasn't only a history of the movement for democracy by intelligentsia in the period when nationalism had spread all over the country, but also was a proof of the limit of such an intelligentsia's movement. The populists faced seriously the difficulties among the poor peasants and the agricultural labourers, the Hungarian reality of that time. Then they presented an antithesis to the leftist's rigid views or neglect of the agricultural problems. It helped make the communists recognize the importance of the poor in the rural area, the peculiarity of Hungary. However, this antithesis was not without contradictions. One of them was the concept "the third course". This fruit of their idealism was abstract and vague, and at the same time possessed retrograde elements disregarding the development of history: for instance, their rejection of feudalism, capitalism and socialism. Though they moved gradually into a political direction, they could not present concrete means for change because they put greater emphasis on the enlightening activities. Moreover, the active members of the movement consisting of the intelligentsia and students could not extend their influence to all over the country, even if they came from the countryside.

In spite of these defects, however, the populist movement played a certain progressive part in the history of Hungarian democracy. First of all, their slogan to make the peasantry a pillar of the "nation" made it possible to mobilize some peasants and students influenced by the nationalism of the counter-revolutionary regime into the movement for the democracy in Hungary. Secondly, their activities like the Village Explorers, the revelation of the miserable situations in the villages and so on, possessed

a very significant and progressive meaning at that time. It could be said that their activities contributed to preparing the rally of democratic forces in the history of the struggle against fascism in the 1930's and 1940's.

〔付記〕

本稿脱稿後、筆者は、折しも来日されたハンガリー科学アカデミー歴史学研究所所長ランキ・ジェルジ教授から本稿へのコメントをいただく機会を得た。その際に指摘された本稿における記述の不備や教授のコメントを、ここで若干述べておく必要がある。

まず第一に、本稿では、1920年代から1930年代にかけてのハンガリー左翼の農村政策の変化が明確にとらえられていないこと。すなわち、ハンガリー社会民主党は、1920年代初期には政府と妥協し農村での活動を放棄していたが、20年代後半から次第に貧農・農業労働者への関心を高め、30年代初めには彼らのために土地改革を要求した。また共産党も、1920年代後半から、政府の弾圧にもかかわらず、農村における活動を重視する方向に向かった。したがって、本稿第1章は、今後研究を進めた上で、ハンガリー左翼の農村政策と題する1節を付け加えねばならないであろう。第二に、ハンガリーの人民主義者は、ロシア・ナロードニキほど経済に関する理論を展開せず、その点における弱点や限界を備えていたが、本稿ではそれが明確に指摘されていないこと。そして、全体として、本稿は人民運動をやや過大評価しているのではないかとのコメントをいただいた。

筆者は、これらのご教示を今後の課題として受け止め、人民運動の研究を一層深めたいと思っている。

(1979年6月末日)